

ミュージアム多摩

No. 34

～特集 写真資料の保存と活用～



Microsoft Silverlight5 による写真表示画面（年代絞り込み結果）

2013. 3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

特集「写真資料の保存と活用」

多摩ニュータウン事業用写真の整理と活用	パルテノン多摩歴史ミュージアム 清水裕介	……………1
日野宿発見隊と「まちかど写真館 in ひの」	日野市立日野図書館 石嶋日出男	……………3
デジタルアーカイブシステム制作の経過と課題	くにたち郷土文化館 菊池義輝	……………5
東村山ふるさと歴史館における写真の活用	東村山ふるさと歴史館 高野宏峰	……………7
たましん地域文化財団の写真資料	たましん地域文化財団 保坂一房	……………8

平成 24 年度事業報告

平成 24 年度の企画委員会の活動について	江戸東京たてもの園 高橋英久	……………9
-----------------------	----------------	--------

会員館活動報告

首都大学東京 91 年館（学芸員養成課程実習室・展示室）	首都大学東京 大学教育センター	…………… 10
東京農工大学科学博物館リニューアルオープン！！	東京農工大学科学博物館	…………… 12
東村山ふるさと歴史館の最近の活動報告	東村山ふるさと歴史館	…………… 13
本町田遺跡公園リニューアル・オープン記念展と 2012 年度町田市立博物館の活動について	町田市立博物館	…………… 13
あしもとの自然に里山のカケラを発見～夏季特別展の成果～	府中市郷土の森博物館	…………… 14
企画展「新町村開村記～新田開発の先駆者・吉野織部之助～」	青梅市郷土博物館	…………… 15
企画展「日活 100 年と映画のまち調布」の開催	調布市郷土博物館	…………… 16
平成 24 年度活動報告	瑞穂町郷土資料館	…………… 16
奥多摩水と緑のふれあい館 [活動報告]	奥多摩水と緑のふれあい館	…………… 17
平成 24 年度寄贈資料「新聞錦絵」にみる、博物館と縁のある人々	福生市郷土資料室	…………… 18
2012 年度の事業等から	武蔵村山市立歴史民俗資料館	…………… 19
写真資料の保存・活用と活動報告	あきる野市五日市郷土館	…………… 20
多摩の歴史講座第 16 回「八州廻りとアウトロー」	たましん地域文化財団	…………… 20
平成 24 年度の活動報告	羽村市郷土博物館	…………… 21
連携事業への試み～若年層にも親しまれる郷土博物館を目指して	清瀬市郷土博物館	…………… 22
平成 24 年度展示事業報告	立川市歴史民俗資料館	…………… 23
国指定重要文化財「小林家住宅保存修理事業」	檜原村郷土資料館	…………… 24
「市境を歩く」～出張展示・市民・他市との連携事例として	日野市郷土資料館	…………… 25
聞き取り調査の現況	小金井市文化財センター	…………… 26
企画展「ハケ展～くにたちの河岸段丘～」	くにたち郷土文化館	…………… 27
平成 24 年度の活動報告	東大和市立郷土博物館	…………… 28
開館 25 周年記念事業展示「つながる！市民のちから～市民と歩んだ 25 年～」を終えて	パルテノン多摩歴史ミュージアム	…………… 29
開園 20 周年を迎えて	江戸東京たてもの園	…………… 30
平成 24 年度の広報活動について	東京都埋蔵文化財センター	…………… 31
平成 24 年度活動報告	集合住宅歴史館	…………… 32
プラネタリウムがリニューアルオープン	多摩六都科学館	…………… 32
平成 24 年度ハンセン病資料館活動報告－展示活動を中心に－	国立ハンセン病資料館	…………… 33
金環日食	八王子市子ども科学館	…………… 34
国立天文台天文機器資料館の活動	国立天文台天文機器資料館	…………… 35

☆特集 「写真資料の保存と活用」

多摩ニュータウン事業用写真の整理と活用

パルテノン多摩歴史ミュージアム 清水裕介

はじめに

多摩ニュータウン（以下、多摩NT）は、東京都・UR都市機構（旧日本住宅公団／旧住宅・都市整備公団）を主要な事業者として開発された。東京都が平成15年（2003）3月、UR都市機構は平成18年（2006）3月に多摩NT開発事業から撤退し、現在は公的なNT開発は全て終了している。

開発事業の終了にともない、近年は現地に置かれていた事務所の移転・取り壊しが相次いだ。東京都は平成14年（2002）に「多摩都市整備本部（旧南多摩新都市開発本部）」を廃止し、平成19年（2007）に多摩市山王下に置かれていた事務所建物を取り壊した。UR都市機構も平成21年（2009）に多摩市諏訪の「多摩事業本部（旧南多摩開発局）」を閉鎖し、関係部署を新宿へ移転した。

この際、事業用資料の処分が進められ、一部は多摩ニュータウン学会や関係者の尽力により、歴史資料・郷土資料としての保存が図られ、当館は写真を中心とする資料の引受先となった。

1. 多摩ニュータウン事業の記録写真

事業用の写真には大まかに分けて①主に航空測量のために大判フィルム（24cm×24cm）で撮影された航空垂直写真、②主に広報用途のためブローニ判や4×5判で撮影された地上写真・航空斜写真、③事業記録（進捗状況・工法・イベント記録など）のため主に35mmネガフィルム・ポジフィルムで職員が撮影したものがある。

【写真1】は航空垂直写真で、現況の測量に用いられた他、モザイク写真とされて計画の検討や説明などに用いられた。国土地理院による撮影のものに比べて縮尺が大きいものが多く、造成工事が行われていた時期は頻繁

に撮影されていたため、工事の進捗状況や変化を追うことができる。デジタル化済みのものは約2200枚で、ごく一部を除き、デジタル化を終えている。整理作業にはUR都市機構担当者からもご助力いただいた。

【写真2】は4×5判で撮影された地上写真で、その年にできた施設や区画、広報に用いるイメージ写真的な写真が多い。

【写真3】は航空斜写



写真3



写真4

真で、初期造成・工事中は35mmフィルム、入居開始後は4×5判フィルムで工事中の区域や完成した施設、駅前地区などを中心に、平成10年頃まで毎年撮影されていた。点数はUR都市機構・東京都をあわせて約1400点（デュープを除く）である。

最も点数が多いのは

【写真4】のような35mmフィルムで撮影されたもので、造成・建築工事前後の様子やイベント記録などが大半である。整理作業中であるため、詳細な点数は不明であるが、コマ数で数えると4万～5万点程度と想定している。

これら多摩NTの事業用写真の最大の特徴は、昭和40年代から平成10年代まで、約40年間にわたって撮影された膨大な写真群である点である。また航空写真や造成工事現場のものなど、関係者以外には撮影が不可能なもの、開発事業の進行中に撮られ、現在では見ることができない景色が記録されているものも多い。一般的に博物館で「歴史資料」として扱われる写真としては「新しい」が、この時期に大きな変化を遂げた地域にとっては貴重な記録である。

2. 写真の整理・活用

前述の記録写真は、大半がフィルムで寄贈され、費用面からプリントは作成せず、デジタル化をして整理を行っている。スキャンは市販のフラットヘッドスキャナ（EPSON GT-X970）を用いて館内で行い、35mm判は等倍2400dpi、ブローニ判は1200dpi、4×5判は等倍700dpiでスキャンし、保存はTIFF、データベースでの表示用には縮小したJPEGを用いている。それぞれの基準は、元のフィルムが持つ解像度・スキャン速度・整理用に用いているPCスペックなどから定めた。4×5判はより高精細な画像を得ることも可能だが、点数が多く時間がかかり過ぎるため、この基準となった。

整理用の台帳には、平成19年（2007）に開始した博物館ボランティア「定点撮影プロジェクト」用に作成した台帳を暫定的に用いている。当館がまとまった形で写真資料を受け入れたのは、平成19年5月寄贈の「南多摩新都市開発本部関係資料」が最初で、4月に準備を開始していた「定点撮影プロジェクト」と収蔵写真の整理作業を同時に進める必要があったためである。

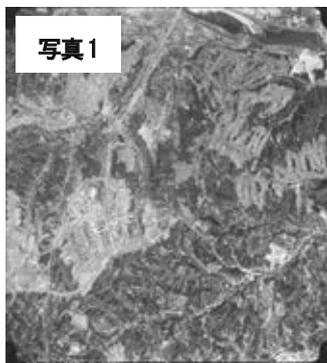


写真1



写真2

「定点撮影プロジェクト」は、古い写真と同じ場所で現況を撮影するものであるため、整理は現在地を含めた撮影場所の情報を重視する形で開始した。



図1

台帳は市民参加型の「定点撮影プロジェクト」を長く続けている飯能市郷土館（埼玉県飯能市）が『写真資料目録1 明治～昭和初期』に掲載している写真台帳を参考に、データベースソフト(FileMaker)で作成した【図1】。

多摩NT区域では、地形の変更をとまなう造成が行われており、整理開始当初は場所が特定できないものが多数を占めた。しかし、データベース上であれば場所や被写体の詳細が分からない状態でも一定の整理ができ、その後の検索が容易なことは、大きな利点であった。【図1】を例にすると、見たままで分かる「昭和」・「工事中」・「鉄塔」・「モノクロ」と原蔵者名をそれぞれの項目に入力しておくことで、同様のキーワードを付けた他の写真と見比べることができ、場所の特定に大いに役立った。

詳細な場所の特定は、「定点撮影プロジェクト」での新旧比較写真の撮影に必須なため、担当による整理時に場所が特定できなかったもの、おおよその位置しか分からなかったものは、プロジェクトのメンバーが聞き取り調査や地図・航空写真との比較、写っている鉄塔・山・建物などを手掛かりに特定を行っている。地域を良く知る市民の協力は、整理作業を進める上で、何より心強いものである。

当館に限らないことと思われるが、整理の上で一番の問題は人員・時間・予算である。現在は写真の整理が担当する企画展示の準備となるように展示テーマを考え、少しずつ作業を進めている。

3.公開方法の検討

写真の公開は展示での利用や図録・資料集への掲載、アウトリーチ事業での利用、「定点撮影プロジェクト」のWEB ページへの掲載などを通じて行っているが、膨大な収蔵点数に対し、公開できているものはごくわずかである。

そのため、現在は整理作業が一区切りついた航空斜写真について、収蔵分の全てを館内で公開ができるよう、利用規約などの最終調整中である(2012年1月現在)。

航空斜写真は、自宅や学校、研究対象区域など特定の

場所を見たいというニーズが強い。高精細なことは、4×5判フィルムが持つ特徴であり、撮影者もそれを意図して用いているため、利用者による検索と拡大・縮小ができるものを最優先に、閲覧システムを検討した。

講座などでは、ネットワーク環境がない場所でも用いるため、ノートパソコン一台で動くこと、館に既存のパソコンで使えること、最終的には費用がかからないことが決め手となり、Microsoft の Silverlight5 の機能を用い、WEB ブラウザ上で表示することとした。制作に必要な Visual Studio 2010 Express は、ユーザー登録をすることで、無償で利用することができる。

【図2】は登録されている写真全てを表示した画面、【図3】は撮影年ごとに分類表示をした画面、【図4】はある年の物だけを絞り込み、表示した画面、【図5】は1枚だけを表示した画面、【図6】は写真の一部を拡大表示した画面である。

必要な機能は備えることができたが、現在は Silverlight5 に標準で採用されている UI をそのまま用いており、昨年のパルテノン多摩開館 25 周年記念の展示で公開した際には、ご高齢の方には使い方が難しいという難点も見られた。今後、より幅広い世代が利用しやすい UI に作り変える必要を感じている。

おわりに

今後、地域資料として博物館が扱う写真の点数はますます増えていくことは間違いない。その一方で、パソコン・インターネットを用いた展示など、公開方法の選択肢も増えており、小規模館でも可能なものも多い。

写真資料は多くの情報を含んでおり、同一の写真でも用いる者によって注目する点が異なり、さまざまな活用の仕方が可能である。そのため、公開によって多くの人の目に触れ、さまざまな情報・視点が加わることで、より貴重なものとなり、館にとっても活用の幅が広がってゆくはずである。今後も館蔵資料を一般に活用してもらえよう、微力を尽くしたい。



図2

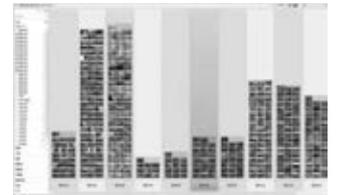


図3

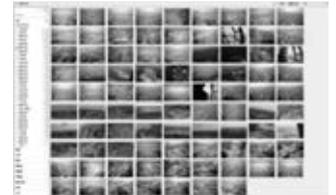


図4



図5



図6

日野宿発見隊と「まちかど写真館 in ひの」

日野市立日野図書館 石嶋日出男

1. はじめに

私の勤務する日野市立日野図書館は7館ある図書館のうちの一つです。JR日野駅から徒歩で5,6分のところにあります。甲州街道の日野宿にあたり、ちょうど図書館の場所にかつて問屋場がありました。

平成17(2005)年に改築し、2階建、延べ床面積400㎡ほどの町屋風の建物になり、利用も倍近くに増えました。



ちょうどその頃、突然、図書館の窓口委託の話が出ました。いろいろ紆余曲折はありましたが、結局、委託は免れました。しかし、図書館としてこれでいいのかという反省もあり、図書館も建物にこもってないで、地域に飛び出していこう、地域をもっと知ろうということになり、平成18(2006)年6月、地域の有志のみなさんと日野宿発見隊というゆるやかな組織を立ち上げました。そのなかにはまちの床屋さんや自転車屋さんなど、いろいろな人が参加してくれました。

当時、日野宿の再生事業というプロジェクトが進んでいる最中で、規制がかかる前に家を建て替えてしまおうとする旧家などで、貴重なお宝が消えていくのを目の当たりにしました。そのような状況を知り、日野宿発見隊として地域に残る隠れたまちのお宝を発見しようということになりました。それがスタートでした。

第一弾は子どもを対象としたまち歩き会でした。3グループにわかれて子どもたちと日野宿内をまわりました。参加する子どもたちばかりでなく、われわれ職員にとっても地域を知るいい機会となりました。これを皮切りに、まちの大切なお宝のひとつである日野の用水を知ってもらおうと企画した「日野用水であそぼう」、また世代間の交流の場として横丁を再現した「ふれあい子ども横丁」など、会のメンバーの発案を受けてさまざまな事業を展開してきました。現在第44弾までに至っています。

2. まちのお宝としての写真(地域資料) —収集・整理・保存—

こうした活動の中でも重点的に取り組まれてきたのが地域に残る写真の収集です。これは日野市が昭和初期、昭和の大不況という時代ですが、積極的に大企業を誘致したのですが、そのなかに小西六(現コニカミノルタ)

という会社がありました。その会社が地元の人を優先的に採用したそうで、会社が休みには社員に写真機を積極的に貸し出してくれたおかげで、他の自治体よりも地元を撮った写真が多数残されていました。これは収集を進めるなかでわかったことでした。

話は前後しますが、収集を始めた当初はなかなか写真を提供してくれませんでした。図書館近くに住んでいる市長でさえ1年ぐらい経ってから漸く出してくれたほどです。しかし、まさに足で稼ぐで、地元を地道に回り、図書館を中心とした取り組みだとわかっていただくと、次第に点数も増え、ロコミで提供者が増え、今では100人以上に至っています。

収集した写真の整理は日野宿発見隊の事務局である日野図書館が担当しています。提供された写真はスキャナーで取り込み、現物は返却します。その後、提供された写真について、提供者やその家族や地域の人たちから一枚一枚話を伺い、それをこまめに記録しエクセルファイルに落とししていきました。下のファイルは昭和33(1958)年に開催されたアジア大会自転車競技の写真ですが、「受入No・タイトル・撮影年・撮影場所・大きさ・撮影者・提供者・キーワード・情報等」を入力するとともに、可能な限り現在の写真を併置しています。この積み重ねが将来的なデータベース化への準備となると思います。



写真は現在1,500枚ほどになっています。そしてその一部は日野宿発見隊のHP (<http://www.hinoshuku.com/index.html>) 上で公開しています。検索も一応可能です。これを見て、外部団体から「日野用水・多摩川」「鉄道」「オリンピック」などテーマにより、写真の使用許可を求めてくることもあります。

この取り組みはあくまでも日野宿を中心とした収集です。日野市郷土資料館の担当者にも内容を伝え、将来的には全市をカバーする郷土資料館がデータベース化を図る段階で合流できるように基本的なデータを押さえたつもりです。

3. 写真の活用

こうして収集を図るなかで、これもメンバーの提案を受け、施設内で展示するだけでなく、まちなかに、それも撮影した当時の場所に展示するという「まちかど写真館」を展開しました。この企画により、日野市在住の地図作家今尾恵介さんが描いてくれたイラストマップを片手にまち歩きをする人たちをたくさん見かけるようになりました。

同時に展示した写真を、地元の人に解説してもらいながら「まち歩き会」や、収集した写真を映写しながら当時の様子を語ってもらうという座談会などを重ね、写真に付随する情報の客観性を高めていきました。もちろんこれまでに出版している日野市史などの文献なども参考にしました。

平成20(2008)年にはこの「まちかど写真館」が、テレビ朝日の「ちい散歩」という番組で取り上げられ、思わぬ町おこしのひとつになりました。このあたりから市の理事者側からの理解も得られ、日野宿発見隊の活動にかかわるものを大いに喜ばせました。日野駅開業120周年記念事業などさまざまなところでこうした写真資料が活用されました。



写真は日野宿発見隊の活動のなかで偶然とりあげられたものですが、これがすべてということではなく、あくまでも活動の一部ですが、提供していただいた写真をまちかどに展示するという方法は、地域へのフィードバ

ックになったのは事実です。折角提供いただいた貴重な写真(資料)ですから、それを最大限に活かす—そのことを最大目標として取り組んできたことが、結果的にはみなさんからの評価をいただく要因となったと思います。

写真の提供者のなかには、それまで大病を患いとても鬱的な状態にあったのが、提供していただいた写真について私がしつこく訊ねるのがきっかけで、ゆくゆくは孫が興味をもったら読んでもらおうと、ご自身が記憶している子どもの頃の様子をイラスト入りで記録し始められました。この方は絵を描かれ記憶力も優れているので非常に面白いものができつつあります。

私は写真資料に関して学芸員の皆さんのような技術的な知識はまったくありませんので、地域の図書館として何ができるかというところでの判断で、まず利用・活用することを第一義的に考え、提供していただいた方への誠意だけはしっかりもって、後世の人へのプレゼントを残すような気持でこの事業に取り組んでいるところです。ある高齢の方ですが、ホームページ上にアップされているご自分の提供した写真を見ながら、とてもうれしそうに当時のことを話される姿は印象的でした。

ところで、これまでお話ししたこの取り組みには当初から、井上博司さんというプロのカメラマンが関わってくれています。彼は地元をベースに仕事をしているカメラマンですが、日野市内のことを実によく知っています。まちづくりについてもとてもよく考えている人です。写真の修整やパネルを作るにも、写真集を作るにも、彼なくしてできませんでした。

4. むすび

最後になりますが、日野市全体の写真のデータベースというものがなかなか実現していません。図書館の電算システムの更新時に作ってはという話もありますが未定です。また日野図書館だけでなく他の図書館でも取り組まないのかとかよく言われます。実は中央図書館で「ひの写真散歩」という事業を進めていました。日野の今を記録するというテーマでしたが、日野宿発見隊のような取り組みとは異なるものでした。一方これはまだ実現に至っていませんが、日野宿発見隊のメンバーのなかから、別のグループとして高幡不動尊のある高幡地区を対象に写真の収集に取り組み動き始めたとききます。来年は市制50周年を迎える日野市ですので、何とか全市的な展開が図れればと願うところです。

地域の図書館として何ができるかというところから始まった「まちかど写真館」の取り組みを報告させていただきましたが、地域の人たちから必要とされる図書館として認められるにはまだまだだと思えます。そのためにも今後も日野宿発見隊の取り組みをいっそう充実させていきたいと考えているところです。

あるかも知れない。館独自のアーカイブシステムが無いにも関わらず多くの写真がデジタル化されている状況で、三博協のシステムを利用してそれらの写真を公開し、情報発信するとともにデータベースとして利用することは、財政状況の厳しい地域博物館にとって魅力的に思われるかも知れない。

何よりもこのアーカイブシステムが、三多摩地域の博物館 31 館というスケールメリットを生かし、地域性を明示しようとする点が画期的である。「甲州街道」、「中央線」など地域に特徴的な多くの写真に、自治体の枠組みを越えて簡単にアクセスできるようになることは、利用者の学びや発見の機会を増大させる可能性をもっている。また、検索の結果、同一の民俗資料などの写真が数点ヒットした場合、三多摩地域のなかでもそのバリエーションの豊かさに驚くことになるかも知れない。WEB 上の企画展で同一テーマの写真を集約して利用者に提示すれば、個別では何気ない写真でもそれぞれの違いが浮かび上がる可能性がある。WEB 企画展の際は、加盟館より 1 点の写真提供をお願いする形にすれば、負担も少なく、三博協のデジタルアーカイブとしての性格を大きく打ち出すことができるのではないだろうか。

以上の他にも様々な可能性が写真アーカイブにはあると思われるが、システム完成後の利用が基本的に各館の自由に任されていることに関して、いくつかの問題を想定できる。まず、アーカイブシステムを有効に利用できる環境が整っている館と、そうではない館との間に不公平感が発生する可能性がある。写真のデジタル化が進んでいても、年代、場所などの情報の検証・確定作業が済んでいない場合などはシステム上に UP できないであろう。何よりも加盟館の負担の増加につながることは間違いなく、作業量に比してプラス面が少ないと判断する加盟館がシステムを利用しないことも想定できる。三博協のデジタルアーカイブの存在意義が、加盟各館の間で合意されていなければならないと思う。

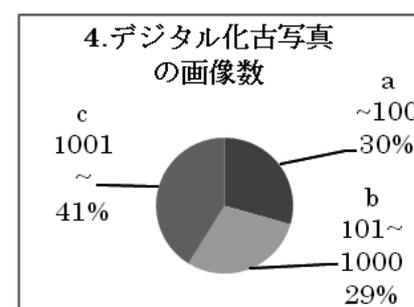
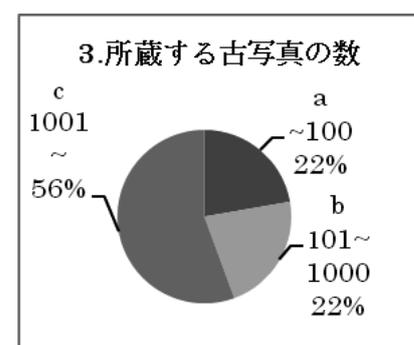
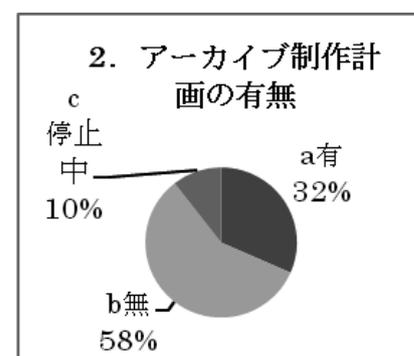
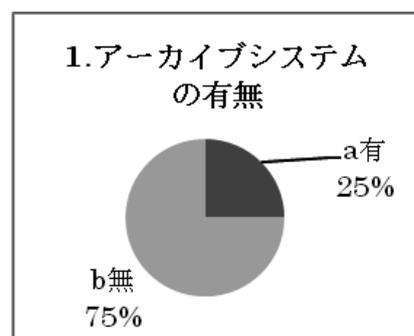
また、システムの維持・運営に関わる費用についてはバナー広告でまかなう予定になっており、ランニングコスト分の広告収入を継続して確保するための営業活動が求められることになろう。また、アクセス件数の増加につなげるため、一般利用者のニーズをアーカイブに反映させていくことも継続的に必要になるだろう。システムの魅力を増し、運用・維持していくためのこれらの作業は、今後の HP 班が担うものだろうが、人員の増加など HP 班の拡充が図られなければ難しいと思う。

これらの課題は、三博協加盟各館に考えていただきたいものであり、加盟館の意見集約の場（総会での意見交換、アンケート調査の継続実施など）が多くもたれなければならないだろう。

おわりに

管見の限り、三博協のような連携組織による地域性の

提示を意識したデジタルアーカイブは他になく、画期的な試みであることは間違いのないと思う。ただし、先に記した様々な課題が想定される写真アーカイブシステムの、完成後の運営態勢については検討の余地が多い。「仏作って魂入れず」という状態を回避するためには、システムに関して、加盟各館がその意義と課題を考え、三博協としての共通認識を作り上げていかなければならない。関係者各位のご協力を願う次第である。



2012年8月15日付で三博協加盟各館に送付したアンケート、21館分の集計結果

東村山ふるさと歴史館における写真の活用

東村山ふるさと歴史館 高野宏峰

1、東村山市史編さん事業と写真収集

東村山市は平成3年から平成15年まで第2次市史編さん事業を実施した。平成3年9月1日より「市報ひがしむらやま」に市史編さんだよりの連載を開始、連載第1回は市史編さん事業の紹介で、その中に次の文を掲載した。

市史編さん室では、いろいろな資料を調査中ですが、特に今、古い写真を捜しています。古いアルバムがありましたらぜひ見せてください。調査員がうかがいます。複写した後、写真はお返しします。

こうして、市民の所有する古い写真の収集が始まり、業務時間の多くをアルバムの複写・写真の整理に費した。平成6年には、市史編さん事業を広く市民に周知するため、市史本編にさきがけて『図説 東村山市史』刊行、その近代・現代・民俗の頁を飾ることとなったのが収集された写真であった。

2、写真整理と所有写真の概要

市史編さんの写真収集で目標としたのは、多種多様な写真の迅速なる収集、統一的な整理であった。額に入った写真、アルバムに貼られた写真等が集められたが、原則的に35mmの白黒フィルムで複写、ネガとベタ焼きを「古い写真の複写」と題したネガアルバムで整理した。これにより、複写写真は統一的番号が振られ、集中管理された。もっとも個々の写真はネガアルバムだと小さいため、重要と思われる写真を厳選し、キャビネ版に紙焼きの上カード化した。カードには簡単な表題と年代などを付し、仮目録を作成、閲覧の際の便宜をはかった。

このほか、市の広報広聴課からネガアルバムを借用し、カード化した写真も多く所有している。これは、東村山の市制施行以降に、市が公共施設・行事などの写真を継続的に撮影し、ネガアルバムに整理したものであった。昭和39年から昭和63までのアルバムは、のちに東村山ふるさと歴史館に移管された。



東村山市立郷土館

東村山ふるさと歴史館の前身。
建物は現存せず、跡地に碑がある。

3、東村山ふるさと歴史館での写真収集と活用

東村山市史刊行後、収集された資料は東村山ふるさと歴史館に引き継がれた。写真の収集・整理方法はかわらないものの、事業規模は縮小し、近年は展示にともなう調査の一環としての業務にかわりつつある。例えば、平成23年夏の企画展「湖郷—狭山丘陵の湖「多摩湖」「狭山湖」をめぐる5つの話—」においては、市内幼稚園・保育園よりアルバムを借用させていただき、多摩湖遠足の関係資料を収集し、展示に活用した。

また、展示に伴う調査の過程で、以前に収集した写真の内容が判明する事例もでてきた。収集写真の場合、写真の当事者から話を聞けることは少なく、内容不明のまま複写だけしておく場合が多い。しかし、時を経ることにより別の写真から人物・建物がわかったり、調査の過程で文献資料から内容が読み取れることもある。平成24年春の企画展「町の記録が語る戦時中の東村山」の際には、20年前に収集した写真と、戦前の雑誌掲載の写真が一致するということがあった。

4、写真の利用と課題

市史編さん事業終了後の写真利用としては、ふるさと歴史館の企画展・特別展に伴う公開が主となっている。写真が多くの人々の目に触れられれば、写真の情報を得ることができて館・来館者双方にとって有益である。古い航空写真や地図との組み合わせも写真の価値を立体的に映し出してくれる。当館でも何度か昭和22年の航空写真を床面に展示したが、好評を博した。

東村山市は平成26年に市制50周年を迎える。市の歴史を紹介する際に、多くの昭和時代の写真を展示する予定である。来館者にとって身近な資料であるので、多くの写真を整理して公開していきたい。一方で、市民が独自に利用するための便宜をはかるには、積極的な周知やデータベース化が必要となるが、課題を解決しつつ取り組んでいきたい。



東養育団皇民道場敷地検分

平成4年に収集された写真。平成24年、養育団発行の雑誌『向上』の記事に同じ写真を見出した。中央縦の大木前の人物が養育団顧問で元首相の平沼騏一郎である。

たましん地域文化財団の写真資料

(公財) たましん地域文化財団 保坂一房

当財団の歴史資料室では、次の5種類、①『多摩のあゆみ』掲載写真、②『多摩のあゆみ』執筆者写真、③伊与田昌男コレクション、④空中写真、⑤絵葉書、に大別される写真資料を所蔵している。以下、それぞれの概要と整理方法などについて紹介する。

『多摩のあゆみ』掲載写真

『多摩のあゆみ』は1975年に創刊され、今年で38年目を迎える。現在までの発行号数は149号である。本誌は特集テーマにあわせて、さまざまな分野の資料写真や多摩各地の風景写真などを掲載している。これらの写真は、執筆者や写真所蔵者・機関から提供されたもの、当財団で所蔵するもの、新たに撮影したもの、などがある。編集時に、おおむね複写版を作製して使用した。オリジナル写真の紛失や破損を防止するための措置であった。

本誌の発行作業が終了すると提供写真は返却して、複写版写真が残った。複写版写真と新たに撮影した写真は、B5判の厚紙台紙に添付して整理した。台紙の下段には、分類番号、タイトル、所蔵者、ネガ番号、撮影場所、撮影年月日、撮影者、掲載誌名(号数)、その他、などの項目を設けて、判明する限りの情報を記載している。分類番号は、地域分類と主題分類を付与した。写真台紙は、分類番号ごとにクリアブックに収納している。

この写真群を本格的に整理しはじめたのは、1991年の財団設立以後である。初期に発行した号数に関しては、複写版写真がなく、情報が不明なものもある。現在、約7,100点を所蔵している。大部分の写真の著作権は、執筆者や所蔵者・機関に属する。当財団では『多摩あゆみ』掲載写真を整理して、7,000点を超える写真群の情報を把握することに努めている。

『多摩のあゆみ』執筆者写真

本誌は執筆者の顔写真を掲載することが、ひとつの特色になっている。これは、創刊4年目の14号から始まり、特集や連載の執筆者写真を集積してきた。

『多摩のあゆみ』掲載写真と同様に、B5判の厚紙台紙に添付して、分類番号、氏名、所属、在住市町村、掲載号数、その他、などの情報を記載している。五十音順にクリアブックに収納して、約680名の写真を所蔵している。長年にわたる執筆者のなかには、複数の顔写真を所蔵している方もいる。多摩の地域史研究を担ってきた研究者の人物データベースともいえるものであろう。

伊与田昌男コレクション

八王子市ご出身の伊与田昌男氏(1914-1989)が撮影した、約28,100点にのぼる写真コレクションである。伊

与田氏は美術学校を卒業後、新聞社の写真部員になり、太平洋戦争中は海軍報道班員としてインドネシアに派遣された。戦後は、医療雑誌社の写真部長やフリーのカメラマンとして活躍されている。1992年、ご遺族より当財団にご寄贈いただいた。

伊与田氏は子どもに愛情をそそぎ、多摩の子どもたちの姿を当時の風景とともに撮影している。また、東京の風物とお祭の写真も数多くある。撮影時期は1930～1970年代にわたり、東京や関東地方を中心に、東北・北陸・近畿などの写真がある。

フィルム規格は、6×6、4×5、35ミリなどのネガ・ポジフィルムである。各写真の情報は不明な点が多々あるが、伊与田氏の著作やメモを手がかりにして、改めて作製したコンタクトプリントとともに、フォトアルバムに記載して整理している。この整理作業は、現在も進行中である。

空中写真

当財団内に設けた「多摩の戦時下資料研究会」の活動の一環として、2004～09年にかけて収集した写真群である。国土地理院とアメリカ国立公文書館所蔵のものを主としたものを日本地図センターより購入した(詳細は当財団HPにUPした「空中写真一覧(日本陸軍・米軍[戦中・戦後])」『多摩のあゆみ』141号を参照)。

次の3つ、①日本陸軍(1936～44年撮影)、②米軍(1944～45年撮影)、③米軍(1946～48年撮影)、に分けられた597点である。その他の空中写真とあわせて、約670点を所蔵している。

絵葉書

歴史資料室では、約5,600枚の絵葉書を所蔵している。このうち戦前期に作製されたものは、東京近郊の行楽地や施設などの写真資料としても興味深い。

例を挙げれば、多摩川、奥多摩、日原鍾乳洞、井の頭公園、多摩御陵、京王閣、鮫陵源、村山貯水池、立川飛行機株式会社、小金井大緑地、東部国民勤労訓練所などがある。

デジタル化とデータベース化

伊与田コレクションは、フィルムの劣化が憂慮される戦前のものから順次デジタル化を進めている。絵葉書も、戦前期のものはデジタル化してHP上の資料検索システムにUPしている。『多摩あゆみ』の編集もデジタル化され、現在は複写版写真を作製しなくなった。写真自体の整理とそのデジタル化を進めてきたが、今後は写真資料全体のデータベース化が課題となってきた。

☆平成 24 年度事業報告

平成 24 年度の企画委員会の活動について

企画委員長 高橋英久（江戸東京たてもの園）

東京都三多摩公立博物館協議会では毎年、加盟館より推挙された有志による企画委員会を組織し、協議会がより充実した活動を行うために、事業内容の検討及び事業の実施を行っています。

本年度は8館より10人のメンバーが推挙され、第一回企画委員会（6月29日開催）において、企画委員長、①研修会班、②ホームページ班、③多摩の博物館さんぽ班に役割分担し、活動しました。

①研修会班は、年度内三回実施される研修会の内容を精査し、会場、講師、内容等の調整を行うと同時に研修会当日のセッティング等に携わります。本年度の研修会は、武蔵村山市立歴史民俗資料館にて「IPM手法に則った害虫防除について—武蔵村山市の事例をとおして—」（第一回）、三多摩地域資料研究会との合同研修会として、東京都埋蔵文化財センターにて「写真資料の収集・保存と活用—地域の記憶・記録を未来に—」（第二回）、東京農工大科学博物館にて耐震改修工事・施設リニューアルの見学会（第三回）を実施しました。本年度の研修会は、現代の博物館活動の実務的課題に関わる内容と、大震災の教訓を活かすための方策を考える内容となり、加盟各館の関心が高く多くの参加者がありました。

②ホームページ班は、一昨年度より多摩・島しょ広域連携活動助成金を受け協議会のホームページを拡充していますが、本年度は加盟各館が所蔵している古写真を中心としたデジタルアーカイブの制作を行いました。これは三博協加盟館が所蔵している古写真をデータベース化しホームページ上で公開、さらにキーワード検索の機能を付加し、多摩地域の行政の枠を超えた広い地域の、かつさまざまな年代の写真を閲覧できるようにするものです。今後、古写真だけではなく、資料写真も含めるデータベースとすることによって、各館の資料情報の共有と利用者の利便性の向上を図り、多摩地域博物館の連絡・協調のための団体である三博協の活性化につなげることを目指していきます。

③『多摩の博物館さんぽ』班は、当年度の10月～翌年3月までの年度下期号および次年度4月～9月の上期号と、年度内二回の情報誌『多摩の博物館さんぽ』を編集しています。内容は加盟館の展示会やその他イベント情報を集約しているもので、多摩地域の博物館ファンにと

って大変好評です。加盟各館で常時配布しておりますが、三博協のホームページからもダウンロードが可能です。

平成24年度の企画委員会は、実務的な技術や知識の蓄積、加盟館各館が持つ情報の集約・公開といった活動ができたと思います。今後、地域に、利用者へ還元し、さらに多摩地域の博物館が活発で魅力的なものになるよう発展させていきたいと考えています。

☆会員館活動報告

首都大学東京 91 年館（学芸員養成課程実習室・展示室）

首都大学東京 大学教育センター 小林加奈

本年度より使用を開始した実習室・展示室

首都大学東京 91 年館 学芸員養成課程実習室・展示室は、京王相模原線南大沢駅すぐの丘陵上にひろがる、首都大学東京南大沢キャンパスに位置します。

当館の実習室・展示室は、首都大学東京における学芸員養成教育のために整備され、平成 24 年度から使用を開始しました。また、三多摩公立博物館協議会にも、同じく平成 24 年度に加盟いたしました。

展示施設としてはまだまだ新しい当館ですが、「91 年館」という建物名からもご想像のとおり、建物自体は、1991 年、首都大学東京の前身である東京都立大学が目黒区八雲から八王子市南大沢に移転したときに建設され、継続的に使用されて参りました。大学外の方もご利用になれる施設として、これまでにさまざまな公開講座や講演会などが行われましたので、お出でになったことのある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

展示室と多目的スペース

さて、当館は延べ面積 482 m²、地上 1 階の構造で、入り口ホールを挟んで東西に「学芸員養成課程展示室」をは



91 年館 エントランス



建物平面図

展示室のご案内



社会人類学

アジア・アフリカの多様なくらしと文化について各地の民族資料をとおして紹介しています。



芸術学

アートの現代的意義と新しい役割について考察する「アートプロジェクト」を紹介。プロジェクトの記録をご覧ください。



日本史学

本学図書館が収蔵する「水野家文書」(複製)を展示。「印」や「紙」から当時の身分関係を読み解きます。



考古学

縄文時代から近現代までの森林伐採・加工の技術の変遷について、実験考古学研究成果に基づいて展示しています。

地形・地質学

過去に何度も震災を経験してきた東京周辺の地形・地質について解説します。



動物系統分類学

身近な昆虫「アリ」について、家族・住まい・食べ物といった視点から、その生態に迫ります。観察コーナーが好評です。



植物系統分類学

キャンパスで発見された新種をはじめ、四季折々の植物標本をご覧ください。

※展示の内容は研究の進展に伴って変更される場合があります。

じめ、実習・講義・企画展示等に使用できるスペースが整備されています。

建物の西側に位置する「学芸員養成課程展示室」では、本学内の7分野（動物系統分類学、植物系統分類学、地形・地質学、日本史学、考古学、社会人類学、芸術学）が保有する研究資料・標本類を常時展示し、学芸員資格取得を目指す学生がさまざまな科目で使用するほか、大学外の皆さまにも公開しております。

展示テーマは東京・多摩地区に密着した内容から世界各国の話題にまで多岐に亘りますが、専門的な研究成果を親しみやすくご覧いただけるよう趣向を凝らし、身近な話題にひきつけたご紹介に努めています。また、大学のキャンパス内に位置し、各研究室と密接な関係を持つ環境や、コンパクトな展示室であるといった特色を生かして最新の研究成果を取り入れた展示の更新にも力を入れています。平成24年度は研究の進展に伴った新資料の追加、季節にあわせた展示替えを行いました。

建物東側には「多目的ホール（学芸員養成課程実習室）」があり、100名規模で使用できる教室設備・資料洗浄のための流し場、作業机、顕微鏡といった実習のための設備が整備されています。ここでは学芸員資格取得のための科目が開講されるほか、学会・講演会等など、学内外で幅広い用途に使用され、名称どおり多目的な空間です。

また、入り口ホールはゆったりと広めの構造です。普段は展示会や講演会等の情報発信や学生の談話の場として使用され、企画展の際には展示台やパネル等を設置して、展示会場に様変わりします。

企画展の開催

展示施設を活用して本学の研究成果をご紹介しようと、平成24年度には生命科学分野（10月24日～11月6日）・考古学分野（3月13日～26日）の2つの企画展を企画しました。

企画展「東京の大自然と生命科学研究」

ここでは平成24年10月24日（水）から11月6日（火）の期間で開催した企画展「東京の大自然と生命科学研究」についてご報告します。

首都大学東京は小笠原に研究施設を持つ唯一の大学であり、島における生物の進化や生態系の成り立ち、新種の発見、絶滅危惧種の保全、外来種の対策などについて都立大時代から40年近い研究活動の実績を有します。また多摩地域、伊豆諸島海域等においてもさまざまな研究を展開しています。この企画展は、これらの研究を第一線で進める生命科学分野の教員によって計画され、「小笠原の植物」「東京の海の動物たち」「多摩のけものたち」「多摩の昆虫たち」という4つのテーマで、東京に生息する動植物について生態学、行動学、神経科学、進化学、系統分類学などの研究成果を紹介しました。

入り口ホールを使用した小さな展示ではありましたが、



企画展「東京の大自然と生命科学研究」

が、会期中には大学祭が実施されたこともあり、700名を超える方の来場がありました。ご来場の方は会場中心の水槽で飼育される海の動物たちをはじめ、小笠原の植物標本、多摩のけものたちのほく製や、キャンパス内で採集された昆虫標本などの展示資料や、最新の研究成果をまとめたパネルを熱心にご覧になっていました。



企画展チラシ

また10月27日（土）には講演会も実施し、展示担当の教員によりフィールドワークの様子や最新の研究成果などが紹介され、活発な意見交換も行われました。

今後の活動

ご紹介した企画展は、「学芸員養成課程展示室・実習室」整備後初の試みでしたが、ご来場の皆さんから様々なご意見をいただいたことは、とても大きな収穫でした。

このような企画展は今後も年に数回のペースで実施していく予定です。また、展示活動の成果を学芸員資格取得希望者をはじめとする学生教育や、研究活動の質的向上に還元しながら、沢山の皆さまに何度も足を運んでいただける施設となるよう、一層の充実を目指していきたいと考えております。

展示室は下記の要領で開室しております。ぜひお出かけ下さい。

- ◆開室時間 11:00～17:00（観覧無料）
- ◆休室日 土～月曜日 大学の夏・冬・春季休業期間
※臨時休室有。企画展開催期間は開室致します。



最寄駅(南大沢駅)からのアクセス

東京農工大学科学博物館リニューアルオープン！！

東京農工大学科学博物館 高木愛子

1. リニューアルオープン記念式典

東京農工大学科学博物館は、一昨年からの耐震改修工事の実施のため全館休館していましたが、おかげさまで平成24年10月3日より、リニューアルオープンいたしました。前日には周辺の大学長、自治体および周辺博物館の関係者をお招きするとともに、本学関係者、学生、博物館協力団体会員など多くの参加者を得て、記念式典が開催されました。

2. 常設展示

この度の耐震改修工事を機に、常設展示室もリニューアルしました。内務省勸業寮内藤新宿出張所から始まる本学の歩みや、工学部のルーツとなる養蚕を中心とした繊維関連の資料など、大学の歴史を感じる展示を行うとともに、本学の現在と未来を発信する場として、各学科の特徴や現在行われている最新の研究を分かりやすく紹介しています。



写真1 常設展示室風景

3. 企画展

リニューアル後、第一回目となる企画展『農工大発 イノベーション・シーズ展 - 人と環境の未来を拓くテクノロジー -』が平成24年11月10日～平成25年3月2日の期間で開催中です。本学で遂行されている非常に水準の高い先端研究プロジェクトの中から、「ヒューマンセンシング」「環境」「デザイン」「健康」というキーワードに関連する8つの研究を紹介しています。

今年度はこの他に、特別展『第31回東京農工大学科学博物館友の会サークル作品展』(2月8日～14日)、特別展『シルクロードからの贈りもの—ウズベキスタンにおける養蚕技術交流—』(3月16日～4月13日)の開催を予定しています。

平成25年度は企画展2回、特別展2回の他、ミニ企画展なども実施する予定です。

4. イベント

本館では、地域の小中学生に対する科学教育に貢献するため、「子ども科学教室」を定期的に開催しています。

繊維から脳科学、コンピューターにいたるまで、さまざまな分野の本学教員が専門テーマについて、実験を主体に分かりやすく指導します。今年度は『色を分けよう！—クロマトグラフィーに挑戦—』、『科学的な目玉焼きマスター教室』、『木を知ろう！—バードコールづくり—』の計3回実施しました。来年度は、6回の実施を予定しています。



写真2 『色を分けよう！—クロマトグラフィーに挑戦—』風景

5. グッズ販売

1月8日より、ミュージアムグッズの販売を開始しました。現在は、当館の主要コレクションの一つである「蚕織錦絵」をモチーフとしたハガキ10種とクリアファイル5種、組ひもストラップ作成キットを販売しています。今後も当館ならではのグッズを増やしていきたいと考えています。ご来館の記念に是非お買い求めください。

6. 協力団体活動

当館には、「科学博物館友の会」と「繊維技術研究会」という、博物館を支援する協力団体があり、リニューアルとともに活動を再開しました。

友の会では、織物や手紡ぎなど繊維に関するサークル活動が活発に行われており、展示室での実演も行っています。また一般の方を対象とした講習会を、今年度は4サークルが開催しました。

繊維技術研究会は、自動繰糸機や織機など繊維機械の整備と操作、解説を担っています。毎週火曜日と土曜日に行う機械の動態展示は、当館の目玉となっています。また、定期的に会員による講演会も開催しており、一般の方々もご聴講いただけます。

また、4月から博物館の学生ボランティア団体を設立することとなり、現在有志の学生達が準備を進めています。新しくなった博物館に、学生ならではの新風を吹き込んでくれることを期待しています。

東村山ふるさと歴史館の最近の活動報告

東村山ふるさと歴史館 宮澤美和子

24年度の事業は現在進行中ですが、今回で13年目を迎える「狭山丘陵市民大学」についての報告をしたいと思います。

この事業は、自治体を越えた事業として東大和市立郷土博物館と平成11年から実施している事業です。市民大学という名前から通常の市民大学をイメージされてしまっていますが、狭山丘陵をテーマやフィールドにした生涯学習の入り口的な講座で、年間の中で3～5回程度の講座・講演会・見学会などを盛り込んだ事業を行っています。参加者の人数もテーマや見学地によるのか、2市合わせても10人以下という日もある一方、60名近くの参加者があった日も過去にはありました。

さて、今年からは武蔵村山市立歴史民俗資料館も参入してもらい、3館合同の事業となった24年度の狭山丘陵市民大学のテーマは「自由民権運動」ということで、多くの方たちの好評を頂き、定員オーバーとなりながらスタートしています。1回目が12月に終了し、第2回目は1月に五日市資料館と埼玉県の入間市博物館のご協力を頂き、第3回目を2月に町田市の自由民権資料館にお世話になり、実施します。

このテーマなどは、東村山市だけで行う事業ではなか

なかむずかしい内容のものですが、共催事業ということで実現し、多くの東村山市民の方たちに紹介することができます。共催事業にはむずかしい面が多々ありますが、各館の得意分野や学芸員の専門性、人脈などのおかげで事業効果が数倍になるという大きなメリットがあります。また、近隣市の状況把握ができることにより、自治体内部への予算獲得などのアプローチにも少なからずメリットを見出されます。

今後、三博協だけでなく、広域な博物館・資料館での共催事業の可能性を考えていきたいと思っています。



過去の狭山丘陵市民大学の講座風景のようす



本町田遺跡公園リニューアル・オープン記念展と 2012年度町田市立博物館の活動について

町田市立博物館 今井圭介

町田市立博物館では、隣接の本町田遺跡公園が施設再整備の工事を終えリニューアル・オープンしたことから、記念展『本町田遺跡と町田の縄文時代』展を2012年3月20日から5月6日まで開催しました。

現在、遺跡公園となっている本町田遺跡は1967年から68年に発掘調査されたもので、縄文時代前期と弥生時代中期という離れた時代の集落が同じ土地に存在していました。発掘当時、そのような遺跡は貴重との評価を受けて保存要請がなされたことから、1971年に遺跡公園として整備がされ、一般に公開されました。1992年には東京都から史跡の指定もうけています。



園内に新しく設置された多目的施設 (2012年7月)

展覧会では来場者の方がはるか昔の町田も思い描けるようにと、本町田遺跡の出土品に加えて市内で発掘された数々の縄文時代の土器、石器類もならべました。関連催事は、文化庁主任文化財調査官・原田昌幸氏と当市教育委員会生涯学習部・川口正幸主任がそれぞれに縄文と関係したテーマで講演をして、来場の方々から熱心な質問とご好評をいただきました。当館では久しぶりの考古展でしたが、成功裏に終了しました。

これに続いては、古代からアジア全域で愛され、文化・芸術にも深い結びつきを持つ花・蓮をテーマとした『蓮 - Lotus Land』展(7/7～9/9)、当館のガラスコレクションの目玉でもあり、質・量とも国内最大級であるボヘミア地方のガラス器を一挙に公開した『ボヘミアン・ガラス』展(9/29～11/25)を開催しました。

1月29日からは『笑いの中に～近代の戯画・風刺画～』展(～3/3)を行い、3月下旬から新年度にかけては町田市内最大遺跡の成果をならべる『忠生遺跡』展を開催する予定です。その2013年度は、当館が町田市郷土資料館として歩み出してから40年目の年となります。

あしもの自然に里山のカケラを発見～夏季特別展の成果～

府中市郷土の森博物館 中村武史

常設展示室から「府中の自然と生物」が消えて久しい。これは開館20年目にして計画されたリニューアル事業の手始めとして、一時的に旧展示の一角を撤去したことに始まる。常設展リニューアルも初年度は順調に進み、くらやみ祭コーナー、こども歴史街道、体験ステーションと、時代に見合ったスタイルに様変わりした。順次改装は続く予定だったが、ここ数年の経済情勢から、年度毎の実施は停滞している現状である。

ここまでの空白期間、つまりは自然の常設展示が復活していない間、特別展・企画展での代行公開を積極的に行ってきた。常設展示資料を別の形で有効活用し、常設展では表現できなかった視点でテーマを展開させることで新たな発見を促してきたわけである。身近な自然を再確認することが当館の主たるテーマでもあり、企画展では、都市化された府中の街に見られる鳥を中心に、特別展では、あしもとネイチャーワールドと銘打ったシリーズでの展開を図った。すでに身近な昆虫、冬鳥と、テーマを設定して夏・冬1回ずつ開催してきたが、いずれも府中を中心とした周辺における生物の情報を扱ってきた。当年度は夏開催の2回目ということで、通常よりも身近の範囲を多摩地域全体に伸ばし、7月21日～9月2日の期間で夏休み拡大版として企画した。タイトルは「里山どうぶつ探検」である。

東京の土台となる武蔵野台地は、過去には広大な雑木林が続く緑の大地であった。農業を生業とし、そこに暮らす人々と雑木林は切っても切れない関係を築き、また、そこに生息する様々な動物たちも、人と自然の絶妙なバランスの中に溶け込んでいた。これが経済成長とともに消滅の一途を辿り、現在ではほとんど見ることはない。ここに人間と共存していた動物たちも影響を受け、ある者は山奥へ、ある者は都市へと進出した。今回注目したことは、都市である府中、およびその周辺には身近な動物として一部里山動物が混在して見られるということであった。元来、都市化が進む以前には里山環境であった場所に里山動物が戻っているだけという話だが、そこはすでに昔の環境とは異なるわけであり、何故に彼らが都市に生活の場を求めるのかが考察対象となった。

展示は、夏休みの子供向けとして内容を噛み砕き、前述した身近な自然に見る里山動物の実態を問う意図は残しつつも、普段見ない動物の剥製標本を間近で観察することを強調した。ゆえに「どうぶつ探検」なのである。

展示構成は以下のとおりであるが、子供たちにとっては、普段は間近で見ることもないツキノワグマやムササビが並ぶ「どうぶつ探検」のコーナーが好評だった。都市化された身近な場所にも、「里山」の遺伝子が散らばっていることに、多少の発見があればと期待しながら組み

立てた内容である。

展示構成

里山ってナンダ?：里山のご概念と、そこに生息する代表的な動物たちを紹介。

都市に侵入する里山どうぶつ：都市に生活の場を求めて入り込む里山動物を紹介。

府中の里山「浅間山」：浅間山の成り立ちと、都市の里山「浅間山」に見られる動物を紹介。

里山どうぶつ探検：多摩地域で現在も生息する野生動物を、オールキャストで紹介。



ずらりと並んだ里山動物
オールキャスト



浅間山にも里山動物が

ここに並ぶ里山動物の剥製標本は、八王子市教育委員会の協力によった。閉館した旧高尾自然科学館の資料が保管されている、めじろ台の旧稲荷山小学校収蔵庫から貴重な動物たちをお借りした次第である。また、関連事業では、本物の里山動物たちを観察する機会として、井の頭自然文化園の全面的協力も得た。特に八王子では、普段あまり外に出ることのない収蔵資料をアピールする結果となり、逆に感謝の意を頂戴した。多摩地域の博物館との連携が良い形で展示会に反映されていたと思う。

来場者にはワークシートを配布し、会場内の展示動物から解答を探させる試みも併せ、時には親子で、時には兄弟で会話しながら観覧する光景が目立っていた。本展のひとつの成果として、タイトル通りの「探検」効果が表れていたのではないと思う。楽しみながら里山動物を認識するとともに、出来れば府中の浅間山が都市にある良質の里山環境であることにも興味を持ってもらいたかったが、このあたりの反応は若干期待通りとはいかなかったようだ。日頃行っている自然観察会で市内に残る自然度豊かな場所へと出向いているが、こちらへの参加を促す意味でも、こうした展示からの投げかけは地道に続けていく意義がある。今年度は東京に見る「里山環境と動物」といった形で、もっぱら子供たちの視線は動物個々に注がれがちであったが、そこから発信される博物館からのメッセージに気づいてもらえるような、巧みな構成を試行錯誤していくことこそ、当館の自然分野における課題であろう。今回の観覧者中、身近な自然にころがる里山のカケラを認識した人が、一人でも多かったことを願うばかりである。

企画展「新町村開村記～新田開発の先駆者・吉野織部之助～」

青梅市郷土博物館 鈴木章久

青梅市郷土博物館では平成24年10月6日から平成25年1月27日までの会期で新町村(現・青梅市新町)の開村について紹介する企画展「新町村開村記～新田開発の先駆者・吉野織部之助～」を開催しました。会期中は延7,000人近い方々にご来館いただき、ご好評をいただきました。

新町村は武蔵野台地で最初期に成立した新田集落で、約400年前の江戸時代初期に吉野織部之助(?～1639)らによって開拓されました。新町村の開村において中心となって活躍した織部之助は戦国大名・北条氏の麾下に属していた武蔵国忍城の城主・成田氏に仕えていました。しかし、天正18(1590)年に北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、成田氏も没落したため、下師岡村(現・青梅市師岡町)に移住して帰農しました。そして、慶長16(1611)年から武蔵野の原野で新田開発に挑戦します。開発の過程では多くの困難に直面しますが、織部之助たちは困難を克服し、新町村の開村を成し遂げました。

今回の展示では織部之助が直筆で新町村の開村経過を書き残した「仁君開村記」をもとに展示を行いました。

「仁君開村記」を含む新町村開村に関連する古文書群「新町村開村記録(都指定有形文化財)」や新町吉野家に伝わっていた古文書群「旧多摩郡新町村名主吉野家文書(都指定有形文化財)」から関連する資料を展示したほか、明治時代初期まで新町村に存在した虚無僧の寺である「鈴法寺」に掲げられていた「木額(市指定有形文化財)」、新町村の大切な水源であった「大井戸(都指定史跡)」に水が枯れる事がないように願いを込めて沈められた「願文石」、幕末に建てられた新町村名主吉野家の住宅「旧吉野家住宅(都指定有形文化財)」の部材(建築当時の棟上の墨書が残されている)などの関連資料を展示しました。

吉野家や新町村に関する本格的な展示は今回が初めてでした。今までの調査結果を一つの企画展として公開し、資料収集や研究において新たな発見があったという点からも、今回の展示は大変貴重で有意義な機会であったと思います。



展示の様子



新町地区のシンボル「旧吉野家住宅」

企画展「日活100年と映画のまち調布」の開催

調布市郷土博物館 平自由

大正元（1912）年9月に4社が合併して本格的な映画会社として日本活動写真株式会社（日活）が誕生して、平成24年で100年を迎えました。日活は東京の向島に撮影所を開設しましたが、関東大震災後は京都に本拠地を移しました。

昭和8（1933）年に、京王電気軌道の調布の多摩川原駅（現在の京王多摩川駅）隣接地に日本映画株式会社が多摩川撮影所を開設しましたがすぐに倒産し、翌年に日活が買収し、東京での現代劇部門の制作事業を再開しました。しかし、戦時下には統制により、新興キネマ、大都映画とともに大日本映画製作株式会社（大映）として統合され、撮影所は大映東京第二撮影所となりました。

戦後になり、昭和28（1953）年に、日活は、大映の東方の染地地区に近代的な日活撮影所を建設し、自主制作を再開しました。また、大映の西方には一時期、中央映画撮影所が開設され、独立プロの作品が制作されました。当時、娯楽の中心であった映画文化は黄金期を迎えており、調布は「東洋のハリウッド」と呼ばれ、多くの作品が生まれました。

その後、テレビの普及により映画産業は苦難の道を余儀なくされながらも、大映は角川大映撮影所となり、

日活とともに、今も市内に2つの撮影所が操業しています。日活の100年を機に、調布市郷土博物館では、映画産業とともに歩んできた調布の歴史を振り返る企画展を、8月12日から10月21日の期間で開催しました。

今回の展示にあたり、戦前から収集・保存されてこられた貴重な映画資料を、映画史研究家の畑三郎氏から提供いただき、会期中には、調布で作られた映画作品をからめながら、日本映画の歴史についてギャラリートークで語っていただきました。



「日活100年と映画のまち調布」展示風景

平成24年度活動報告

瑞穂町郷土資料館 近藤春香

瑞穂町郷土資料館では、「郷土を知り、郷土を愛し、郷土を大切にすることを活動目標として、日々努力しております。

～企画展「瑞穂町の石造文化財」～

瑞穂町文化財保護審議会では、平成23年度より町内の石造物の再調査を続けています。

近年、瑞穂町にも都市化の波が押し寄せ、開発が進むにつれ、郷土とともに過ごしている路傍の石造物も、その位置を変え、時には失われようとしています。

この企画展は、11月13日から平成25年1月31日まで開催し、各地区から代表的な石造物を写真パネルにして紹介し、文化遺産である石造物を大切にしようと呼び掛けました。



企画展 展示風景

～機織り・染色事業～

当館では、昨年度に引き続き、村山大島紬伝承会の指導のもと、郷土の伝統的な絹織物「村山大島紬」の技術保存・織子の育成・村山大島紬の周知を目的として、機織り・染色（藍染め）の一日体験教室と、長期的に機織り・染色（草木染め）を学ぶことができる学習教室を開催しています。

今年度は、この学習教室に参加した生徒によるボランティアサークル「みずほ染織伝承会」が発足しました。このサークルでは、村山大島紬技術保存に向けて村山大島紬の歴史・技術などの知識を掘り下げて学習し、また村山大島紬が身近なものとして感じてもらえるよう、周知に努めています。

～その他の事業～

その他、古文書講座や各地区を巡回して地域の歴史講演会を実施しました。子供たちや地域の人々が郷土に親しんでもらえるよう、また身近に感じてもらえるよう、努力をしていきたいと考えています。

奥多摩水と緑のふれあい館 [活動報告]

奥多摩水と緑のふれあい館 加藤芳幸

奥多摩水と緑のふれあい館は、旧奥多摩郷土資料館をリニューアルし、本年 15 周年を迎えます。このため、記念イベントも計画しているところです。

新装開館以降も大勢のお客様をお迎えし、昨年 の 12 月には入館者が 350 万人を突破しました。

東日本大震災後しばらくは自粛ムードが漂い、観光どころではないということも影響し、来館者数の減少もありましたが、徐々にですが震災前に戻りつつありますので、今後も多くのお客様にご来館いただけますよう気持ちを新たにしよう心がけています。

昨年リニューアルしました展示コーナーは来館されたお客様（特にお子様向けに）にご好評をいただいております。また、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の彩色の変化が目当たりに楽しめる場所に立地しているという当館の条件をいかし、館の PR 活動に力を注ぐことや、水道局や JR 東日本等、団体との共催事業の実施により入館者の確保に力を注いで参りたいと考えております。今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと思っています。

24 年度の当館の主な活動としては次のイベント等を実施しました。

- 4 月・春のミニコンサート（2 日間延べ 4 回公演）
内容：ソプラノ歌手の共演
- 6 月・水道週間（7 日間）東京水等配布（都水道局と共同）
- 9 月・ヘブンアーティスト公演（午前午後の 2 回公演）
内容：パントマイム・マジック等
- 9 月・水源地郷土芸能フェスティバル
内容：小河内の郷土芸能（獅子舞 2 団体及び鹿島踊りの上演）
- 10 月・都民の日イベント（ビデオ上映等）
- 11 月・秋のミニコンサート（2 日間延べ 4 回公演）
内容：都民交響楽団の演奏
- 9 月～12 月・奥多摩湖周辺の四季・風物等の写真展示コーナー展示一新
- 川野車人形上演（25 年 3 月中旬予定）
- 水道作品コンクール受賞作品の展示
作文及びポスター

※25 年度についても春・秋のミニコンサートを主に郷土芸能の公演等を予定しています。



ヘブンアーティスト公演と郷土芸能フェスティバルでの獅子舞の上演

平成24年度寄贈資料「新聞錦絵」にみる、博物館と縁のある人々

福生市郷土資料室 青海伸一

博物館には様々な機能、役割がありますが、その一つに資料の収集が挙げられます。自治体における財政運営は年を追って厳しくなっており、博物館における資料の購入費もかつてに比べて大幅に減らされているというのが公立博物館の現状です。そのような中、新たな資料を収集するうえで重要となってくるのが寄贈資料です。

例年、福生市郷土資料室でも市民の方々を中心に様々な資料の寄贈を受けており、感謝の念にたえません。寄贈を受ける資料は、基本的には福生市に関係するものや、市内での生活に関係するものを中心としています。時には、展示を見た方からその展示に関係するものについて寄贈を受けることもあります。例えば、戦争に関する展示を行った際に、戦争に関係ある資料の寄贈を受けることもあれば、鳥類に関する展示を行った際には鳥の標本の寄贈を受けたこともありました。

平成24年度中には、明治時代に発行された、「新聞錦絵」約70点を中心とする錦絵の寄贈を受けることになりました。新聞錦絵は、木版錦絵と文章でニュースを伝えるもので、寄贈を受けたものは特に資料の少ない上方のものが多くを占めていました。また保存状態の良いものがまとめて発見されたもので、今後の研究にとっても貴重な存在です。この寄贈資料は、以前福生市文化財総合調査の中でお世話になった、国文学者の尾形侑(つとむ)先生との縁がきっかけとなり、実現されたものでした。

今回資料を寄贈していただいたのは、尾形侑先生の長男である尾形敏明氏で、国文学者の頼原(えばら)退蔵先生の孫にもあたる方です。ご両親の荷物を整理されていたところ、多くの資料の中に今回寄贈いただいた資料がまとめて発見されたそうです。そこで尾形敏明氏は、これらの資料が永く保存され、公開されることを希望し、以前より縁のあった福生市郷土資料室に寄贈していただくことになりました。

寄贈いただいた資料は、国文学者として活動されたお二人に関わる形で残されたもので、数量としてもまとまったものであることから、福生市郷土資料室の新たなコレクション「頼原退蔵・尾形侑コレクション」として収蔵することになりました。寄贈を受けた資料を整理し、多くの方々にも知っていただくため、平成24年度の特別展示「新聞錦絵—頼原退蔵・尾形侑コレクション—」として平成25年2月から4月にかけて展示し、展示図録の刊行もいたしました。

福生市郷土資料室では以前から、少しでも特徴を出せる資料の収集に努め、ちりめん本の収集によるコレクションや、赤羽刀を約100本引き受けた刀のコレクションなどがありましたが、今回文化財総合調査が縁となり、

まとまった形で資料の寄贈を受けるケースに巡り合うことになりました。いつもこういったことがあるわけでもありませんし、そういったことにだけ期待していくというわけにもいきませんが、博物館機能の充実に果たす「博物館と縁のある人々とのつながり」の大切さを改めて実感するできごとでした。

資料の収集にあたっては、もちろん館の方針というものがあると思います。しかし、そればかりではなく、今まで収集したことのなかった種類の資料であっても、何らかの縁がきっかけとなって新しいコレクションを形成し、関連する資料の収集を通じてコレクションが充実していくということは、今後の博物館活動の一つの展望としても十分に考えられます。まして、財政状況の厳しい折、新しい資料の購入が困難な状況下ではなおさらのことではないかと思えます。

言うまでもなく、資料は集めることばかりが目的ではなく、後世にしっかりと伝えるとともに、多くの方々に知っていただき、研究が進むことも重要です。そういう点からも、まずは今回寄贈いただいた資料を末永く保存するとともに、調査研究が進むよう、また、少しでも多くの方々に資料の存在を知っていただけるよう、HPへ掲載するなどの広報活動にも努めていきます。

今後も、博物館を通じてつながりを持つことになった多くの方々との縁を大切に、様々な博物館活動を行っていきます。



東京日々新聞第833号



大阪日々新聞第14号

2012年度の事業等から

武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋健樹

1 2012年度資料館事業

資料館では、基本的に春夏秋冬に合わせて事業を計画しています。今年度も春は企画展「村のくらし～膳椀組をとおして～」(内容は「資料館だより第54号」で紹介)とくん蒸消毒作業、夏休み子ども企画展「原始・古代のものづくり」・子ども体験教室「石器を作ろう」、秋は東京文化財ウィーク期間の特別展「武蔵村山の古刹“眞福寺”」と、特別展に合わせた文化財見学会「眞福寺とその周辺の文化財」・歴史講座「眞福寺を語る」、冬は東京大空襲に合わせミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」・自然観察会「狭山丘陵の早春」を実施、または実施予定です。また、「年中行事展」として5月「端午の節供展」、7月「七夕飾り」、秋「十五夜」「十三夜」「恵比寿講」、冬「正月飾り」「桃の節供」を開催しています。

各事業とも、武蔵村山に根ざした事業となるように心がけ、できる限り地元の資料を中心として展開できるよう苦心しています。展示された自分の寄贈資料を見に来られる方もおり、一応の成果が上がってきていると感じます。この状況を継続させながら、今後は狭山丘陵をテーマとするような広い視野での事業が求められてくるでしょう。

2 特別展「武蔵村山の古刹“眞福寺”」の副産物

特別展は、眞福寺の御住職中藤氏と打ち合わせを重ねての展示でした。内容は、和銅3年(710)草創と伝えられる古代、中興開山期(1290年)の南北朝町～室町時代、戦国時代の中世後期、情報量豊富な江戸時代に大別して展開し、詳細は「特別展解説書」として公開しています。

副産物は、「“中藤”地区に広がる村落が眞福寺を中心に計画的に構築された？」という新たな方向性です。その時期も、眞福寺の整備が進んだと思われる室町時代に設定可能な状況が伺えます。

左図がその状況を示した図です。この“中藤”地区は東に細長く開析された谷戸で、周辺の狭山丘陵とは40～50mの比高差があり、眞福寺からは坪庭のような景観です。谷戸の奥部は三方向に枝分かれていて、各々の谷戸に「溜池」が構築されています。江戸時代の絵図には「御岳道溜井(番太池)」「赤坂溜井(赤坂池)」「蟹ヶ沢溜井」が明確に描かれていて、その下流には規模の大きな水田地域が広がります。また、この“中藤”地区には「ダイダラボッチの井戸伝説」が残されていて、その井戸(湧水)が、少なくとも3ヶ所知られています(古老によれば、十箇所近くあるとのことだが、他は不鮮明です)。この伝説も集落が構築された頃から、共有の水源地を守るための言い伝えではないでしょうか。

溜池の一つである番太池とダイダラボッチの井戸の北側丘陵は“御嶽山”と呼ばれ、山麓には江戸時代に眞福



寺が管理していた御嶽神社が祭られています。

水田地域を挟んで南側の台地上に眞福寺が東を向いて建立され、その東に十王堂を伴う堂山墓地がさも眞福寺と対峙するように位置しています。この堂山墓地周辺には「寛正六年(1465)銘五輪塔地輪」が出土し、尼寺伝説？が残るその南側からは禅尼銘が刻まれる石碑片が採集されています。また、眞福寺南側の“屋敷山”からは室町中期(15世紀代)に焼かれた常滑窯大甕が発見されています。その他、眞福寺の対岸には、板碑群の再祀場所と思われる“阿弥陀が峰”に17基の板碑が残され、“中藤”地区中央には、南北に貫く鎌倉道がダイダラボッチの井戸傍を抜け、十王堂・堂山墓地などを迂回しているとの伝承が残るなど、不確定ながらも興味深い資料が散見されます。

今後は、意識的に、伝説に沿った資料確保を目指すと共に、狭山丘陵周辺の類例探索が必要と考えています。

3 今後の博物館等施設の活動について

近年、指定管理される博物館等施設が増加していて、それは三博協加盟館においても同様です。その状況の中、今年度から三多摩公立博物館協議会は「デジタルアーカイブ」をホームページ内に立ち上げます。HP創設のため3年間の多摩島しょ広域連携活動助成金を利用した最後の年の事業です。デジタルアーカイブについては、今後の博物館活動に新たな展望を伺う大切な事業として捉えることができますが、率直なところ、指定管理館と直営館ではその取り組みに温度差を感じます。入館者・利用者等の拡大を求められる中で、視点・視野の拡充は不可欠なのではないでしょうか？基本的には積極姿勢が求められるべきです。

しかしながら、資料の不正使用・HP管理費等の確保など、問題点も山積しています。開設したHPの消極的廃止は、三博協や加盟館への影響を考えるならば最も避けなければならないことでしょう。

既に歩き出した事業に対し、自館も含めて各館とも積極的な取り組みを期待しています。これが、退職を迎えた老職員の戯言であってほしいと願う次第です。

写真資料の保存・活用と活動報告

あきる野市五日市郷土館 関根輝雄

1. 写真資料の保存・活用について

五日市郷土館では、現在約10万点近くの写真資料を収集・保管しています。これらの資料の内容は、白黒・カラーのネガフィルムをはじめとしてスライドフィルム、白黒・カラーの紙焼き写真やガラス乾板などです。また、これらの資料の大きさも様々で、特に紙焼き写真はその形状もさまざまです。

館では、これらの写真資料の保存及び展示・活用を目的として平成23年度から2か年にわたりデジタル化を進めてきました。デジタル化にあたり、画像の保存方法をどのようにしたら良いか検討してきました。その結果、記録形式はJPEGとTIFFの2形式で保存することとしました。JPEGデータは、主に普段利用する資料として使うことを目的としました。また、TIFFデータは、展示用に利用したり資料の保存を目的として作成しました。また、記録媒体は、DVDとハードディスクの2種類で保存しました。これらの資料のデジタル化が終了した後、平成25年度以降に展示等で活用する予定です。

写真資料のデジタル化を進める中で、いくつかの問題点が見えてきました。中でも、多くの写真資料が、年代・場所等が不明なものがたくさんあり、これらの特定作業にかなりの時間がかかりそうです。

2. 最近の活動報告

平成24年度は、体験教室として「機織り」、「樹木の葉っぱの形を見てみよう」、「化石採集」などを行いました。今年度、五日市郷土館の耐震補強工事のため11月24日から平成25年3月31日まで休館となっているため館内での教室は行っていません。敷地内にある旧市倉家住宅を使った年中行事は、例年通り行っています。12月から1月には、羽子板、破魔矢、2月から3月にかけて、ひな人形を住宅内に展示しました。



化石採集の様子



機織り体験教室

多摩の歴史講座第16回「八州廻りとアウトロー」

(公財) たましん地域文化財団 坂田宏之

(公財) 東京市町村自治調査会多摩交流センターと共催してきた「多摩の歴史講座」は平成24年度で第16回を数えました。毎回、多摩の歴史を知るための手がかりとなる、ホットな研究をテーマとして選んで開催しておりますが、今回は「八州廻りとアウトロー」というテーマで、9月26日から11月21日までの隔週5回、国分寺労政会館において開催しました。

近年、パルテノン多摩特別展「一ノ宮万平とその時代」、府中市郷土の森博物館特別展「アウトローたちの江戸時代史—19世紀の府中の世相—」など、江戸時代後期の関東地域で社会問題となっていた、無宿や博徒といった身分秩序からはみ出たアウトローと地域の関係をさぐる展示があります。また、こうしたアウトローを取り締まるために設置された八州廻り（関東取締出役）に関する研究については、関東取締出役研究会編『関東取締出役』

(岩田書院、平成17年)があり、八州廻りの活動の全体的な通観が行われています。

そこで取り締まった側（八州廻り）と取り締まられた側（アウトロー）双方の視点から、多摩の幕末期の社会を学ぶ、というコンセプトで本講座を企画しました。各講の講師及びテーマは以下の通り。

第1講 桜井昭男氏「八州廻りの誕生と村々」

第2講 牛米努氏「武装する集団と八州廻り」

第3講 高橋敏氏「嘉永水滸伝のアウトローたち—関東

における博徒の展開—」

第4講見学会 花木知子氏「史料にみるアウトローたち—藤屋の万吉、小金井小次郎など—」

第5講 高尾善希氏「博徒小川の幸蔵とその時代」

第1講、第2講は、八州廻り研究からの講義でした。八州廻りの設置と設置当初の各村を教諭する業務、そしてこの業務の円滑化のための改革組合村の設置について。この改革組合村が博徒の武装化にしたがって、農兵を設置するなど武装化していく状況。この取り締まりを指揮する形に変化していった八州廻りの活動などをご解説いただきました。

第3講から第5講はアウトロー研究の立場からの講義でした。博徒が反権力的・反社会的様相をもってくる状況、武州石原村幸次郎一味や小金井小次郎、小川村の幸蔵などの実態を史料からご解説いただきました。なかでも第4講は、府中市郷土の森博物館のご協力で、同館所蔵の小金井小次郎に関する古文書・錦絵などを間近に受講者の皆様にご見学いただく印象的な講座となりました。

今回は150名ものご応募をいただいた中から、抽選で120名の方に受講していただきました。取り締まる側、そして反抗し取り締まられる側を対比するというテーマもあってか、質疑応答も盛んな熱い講座となりました。本講座は当財団機関誌『多摩のあゆみ』第150号（平成25年5月15日刊行）の特集として再構成する予定です。

平成 24 年度の活動報告

羽村市郷土博物館

当館では「多摩川とともに」をメインテーマに、羽村の自然・歴史・文化を伝えるため玉川上水、養蚕、中里介山に関する資料を館内に、また屋外には羽村の歴史を今に伝える「旧下田家住宅」などの常設展示を行っています。今年度については、次の企画展を行い羽村の歴史・文化等を紹介しました。

企画展

『地口行灯 100 展』

羽村市内の各地域には、神社の祭礼時に境内をはじめ、氏子の庭先や玄関前に地口行灯を飾る習慣があります。

地口とは、語呂合わせや駄洒落などを楽しむ言葉遊びの一種です。地口行灯は、これらの洒落た文言と面白い略画を紙に書いて箱行灯に貼って火を灯し、お参りにくる人が歩きながら読んで楽しむものです。

今回は、地口絵を 100 点集めて、地口行灯を作り展示しました。

展示期間 3月25日～7月1日



企画展『地口行灯 100 展』ポスター



企画展『地口行灯 100 展』展示の様子



腹よりだんご

(元句：花よりだんご)

『玉川上水 ～かたちとやくわりのヒミツ～』

都内の小学校 4 年生が社会科で学習する玉川上水について、羽村の取水堰を中心に、基本的な役割りを模型やパネルを使いわかりやすく展示しました。

展示期間 7月15日～12月16日



取水堰の模型で遊ぶ子どもたち

連携事業への試み～若年層にも親しまれる郷土博物館を目指して

清瀬市郷土博物館 古川百香

清瀬市郷土博物館では、例年実施している企画展や伝承スタジオ事業等に加え、「児童・生徒・学生といった若い世代により博物館を活用してもらうためには？」という課題に取り組んだ1年でもありました。本稿ではそれらの活動を振り返り、紹介したいと思います。

学芸員パートナーシップ制度の導入

まず学生向けの事業として、学芸員を志す、あるいは博物館に関心のある大学生・院生に、学芸員と協力関係にある存在（学芸員パートナー）として業務の一部を担う「学芸員パートナーシップ制度」を春から本格的にスタートさせました。

この制度は、資格取得のための実習とは異なり、実際に博物館業務に直接関わる機会を学生に提供することによって、“未来の学芸員”の養成に資することを目指しています。同時に、各種事業の実施に際し、学生の協力を得ることで教育普及活動等の一層の拡充を図ることも目的としています。募集は、前年度末に希望する学生対象に説明会を開催した上で行い、平成24年度は7名の登録がありました。

学芸員パートナー（以下、パートナー）の活動内容は、資料整理・調査研究、年中行事などの催し物、展示解説、広報活動、障害のある方への対応など…専門に関わらず幅広い業務の補助を想定しています。今年度は、主に伝承スタジオ事業（茶摘み・茶もみ、うどん作り、もちつき）の補助、古文書の解説、展示物の作成、企画展設営の補助、企画展会期中の監視などの業務に携わってもらいました。

またパートナーには「活動日誌」に活動内容の記録や感想を記入してもらっています。担当学芸員がコメントを記入して本人に返却するため、活動後も自身で振り返りができるようにしています。パートナーからは、「直接業務に関わることで、普段見られない博物館の実態を知ることができた」「展示作りの具体的な方法を学ぶことができて良かった」という声が多く聞かれ、学生たちのスキルアップの一助になっているのではないかと思います。

登録期間は1年間としており、更新もできるようにしています。学生を対象としているため、メンバーの入替は避けられませんが、未来の学芸員がこの中から生まれることを祈りつつ、今後もこの制度を発展させていきたいと考えています。

児童センターとの連携事業の実施

児童・生徒の拡大を図るための取り組みとしては、当市児童センターと連携し、「ジュニアリーダーズクラブ（以下、JLC）」「ジュニアスタッフ委員会（以下、J/S）」に登録している子ども対象の体験学習を実施しました。

JLC と J/S はともに児童センターで組織しており、子

どもたちが主体となって様々な交流活動等を行っているクラブです。小学4年生から高校3年生までを対象としています。

連携事業の実施にあたっては、双方の担当で打ち合わせを行いました。結果、郷土の歴史や文化を学ぶことを目的に、年に2～3回博物館での体験学習をJLC及びJ/Sのスケジュールに組み込むこととし、今年度は「うどん作り」を6月に、「焼きだんご作り」を10月に実施しました。どちらも小学4年生から中学生まで15名ほどの参加があり、郷土料理が生まれた歴史的・文化的背景を学びつつ、熱心に取り組む様子がうかがえました。最後にみんなで試食しましたが、自分たちで作ったうどんや焼きだんごは格別の味わいだったようです。

今回の体験学習は郷土料理を取り上げましたが、来年度以降も内容を変えながら継続して行う予定です。



児童センターと共催で行った焼きだんご作りの様子

博学連携：体験学習の受け入れ

今年度は例年の学校団体の見学受け入れのほか、市内の中学校から2年生の「総合的な学習」で体験学習をしたいという申し出がありました。「地域・伝統文化の学習」を体験という視点で深めることを念頭に置き、どのような体験学習を館で展開できるか、前年度より担当の先生方と打ち合わせを重ねました。

使用する施設の規模や対応できる職員の人数の関係で、実習日を2月14日・15日の2日に分け、約70名の生徒たちが伝承スタジオで郷土料理の調理体験と試食を行いました。

どの事業も今年度にスタートした取り組みばかりで、試験的に行ったものもあるため、反省点や改善点も少なくありません。また、実施後の利用者層の変化といった実際的な影響が見えてくるのはこれからになると思いますが、それぞれ改善を加えながら継続し、少しずつでも拡充していくことができればと考えています。

平成 24 年度展示事業報告

立川市歴史民俗資料館 野口枝美子

立川市歴史民俗資料館では、平成 24 年度は企画展 4 回とミニ企画展 4 回を開催しました。通常は夏・秋季企画展及び春季の新収藏品展の 3 回ですが、今年度は市内地域学習館との連携事業企画展や、企画展を開催していない時期にラウンジを利用して、収蔵資料の活用と集客を図るため、所蔵民俗資料の中からミニ展示を開催しました。今回はその中からいくつか展示事業をご報告したいと思います。

企画展「多摩地区と我が家の戦争・戦後」

平成 24 年 7 月 10 日（火）から 22 日（日）まで、企画展「多摩地区と我が家の戦争・戦後」展を開催しました。

立川市は今年平和都市宣言 20 周年にあたるため、教育委員会生涯学習推進センター内で構成されている平和人権プロジェクトにて開催した事業であり、元々は地域学習館や市役所で展示された巡回写真展です。写真展自体は、地域学習館の職員及び、多摩地域戦争遺跡研究家の方と多摩地域の戦時下資料研究会の方々が展示構成・資料作成しました。当館は写真展の一会場であったため、至極当然と言えますが、収蔵資料の中から立川市内に関係する戦争資料の企画展を同時開催したという経緯です。

立川がなぜ空襲の標的とされたのか、そして戦争中の立川市民の生活の様子がモノからイメージしやすいような展示構成を心がけました。アンケートからは「わかりやすかった」との感想から、「もうちょっと掘り下げた内容を…」との意見をいただき、今後の展示へ活かしていきたいと考えています。

また、他市と比べると「遅い」と言われそうですが、今までに取り組んで来ずにいた地域学習館との合同プロジェクト、写真展と企画展の融合事業は、小さな、しかし新たな一歩として、この経験を次に活かせると信じています。

企画展「立川の文化財」

平成 24 年 11 月 1 日（木）から 30 日（金）まで、「立川の文化財」展を開催いたしました。本企画展は、普段実物を見る機会のない市指定有形文化財を展示することで、市域内に存在する文化財への興味関心と、文化財保護への再認識という目的で開催されたものになります。

今回は 10 数年ぶりに個人所有の指定文化財を一堂に会し、別名「市指定文化財」展とも言える展示となりました。展示のウラでは、普段職員でも目にすることのない大型資料を借用する際に庁用車に乗りきらないという大ハプニングがあり、冷や汗をかきながらの準備となってしまいました。また、担当職員の実力不足により、結果的に事細かな資料情報と共に紹介するというよりも、一つ一つの資料を来館者の方たちに実際に目の当たりにして資料の声を読み取っていただくような展示となってしまいました。

別件ではありますが、折しも今年度は立川市内の国登録有形文化財が解体されました。最善は尽くしましたが文化財解体の流れをせき止めることはできず、どちらかと言うと悪い方向に文化財への興味を持たれてしまった事例となってしまいました。良くも悪くも、文化財の保護方法が問われた年だったように思います。



国指定重要文化財「小林家住宅保存修理事業」

檜原村郷土資料館 清水正治

小林家は、江戸時代に藤原地区の組頭を勤めていた家柄であり、東京の山地の民家として、村一番の古い家といわれ、標高600m余りの南斜面に立つ一軒家で東京都から山梨県へかけての民家の関連をすることができる貴重な建物です。

建物は、昭和53年1月に国の重要文化財に指定されました。建築年代は、建物の構造と当家に組頭としての古文書が残されていることから見て、江戸時代中期の元禄16年頃に建てられたものと推定されます。

本屋は、建坪約53坪で西側面を除く三方の縁を後設、南正面はせがみ造り、屋根は、茅葺で入母屋造りの形式を持っています。内部は、土間・ざしき・なんど・とばでい・奥でい・床の間が設けられています。そのほか付属屋として厩・便所・倉・納屋があります。



解体前本屋と付属屋



解体作業中



解体後

檜原村では、平成17年に所有者のご理解をいただき土地・建物を買収、その後、小林家住宅の腐朽や損傷状況を考慮し、保存修理を実施することになりました。これにより、平成23年度から平成26年度の4ヵ年で保存修理事業が実施されております。

平成24年度では、建物の解体工事が完了いたしました。

事業は、平成26年度まで行いますので、今後も機関誌の中で情報提供していきたいと考えています。また、完成いたしましたら興味のある方はご覧頂きたいと存じます。

「市境を歩く」～出張展示・市民・他市との連携事例として

日野市郷土資料館 中山弘樹

日野市郷土資料館を拠点に活動している市民調査グループに「七生丘陵調査団」がある。浅川右岸に広がる丘陵「七生丘陵」を中心に一帯の自然・民俗・歴史について4年以上にわたって地道に活動を続けている。調査活動の成果は平成21年度の特別展「七生丘陵の自然と暮らし」にその一部をまとめたのを皮切りに、高幡不動駅コンコースでのパネル展などで紹介してきた。本稿では、この市民調査グループが「市境」に着目して展開した活動を事例に、博物館事業の新たな展開について紹介してみたい。

1. 私鉄駅コンコースでの出張パネル展

日野市郷土資料館は、ふらっと出かけてみようというような地の利に恵まれているとは言い難い。いくら良い内容でも「待ち」の姿勢では、多くの方々に観覧いただくことができない。そうした状況を打破したいと願う調査団ともども開拓したのが、京王線高幡不動駅南北コンコースでパネルを展示するという手法だった。極めて限られた団体にしか利用許可されないスペースを、平成22年度より年に何回か各展示に付き約1か月を限度に利用させていただき、好評を博している。

昨年度開催したのが「市境を歩く」展だった。「市境」を歩き、その背後の歴史を探る。斬新な視点に加えて、調査団メンバーによるスタイリッシュなパネルのレイアウトもあり、話題になった。



京王線高幡不動駅南北コンコースでのパネル展の様子

2. 歩く講座の開催と他館との連携

昨年度の展示を踏まえ、今年度は七生丘陵調査団が講師となって、12月1日(土)、市民対象に実際に市境を歩く講座を開催した。題して「歩いてみよう～日野市・多摩市の市境～」。日野市内在住で当館の事業にも多くのご協力をいただいている地図研究者・今尾恵介氏の事前講義「地図で境界を見る」の効果もあってか、30名定員のところ、多摩市側を含む36名の申込みがあり、今年度の大ヒット講座となった。

市境を歩くという性格上、歩くルートは日野市、多摩市を行ったり来たりする。また市境の設定には、一方の

当事者である日野市の事情のみでなく、多摩市の事情もある。そんなわけで、今回、パルテノン多摩歴史ミュージアムに館としてご協力をお願いし、ご多忙のところ乾学芸員に御助力いただいた。乾学芸員には事前の打ち合わせからご参加いただき、当日には、多摩市側にある十二神社、万蔵院、小野神社について、現地でも詳細なレジュメを元にわかりやすく、かつ大変興味深い解説をしていただき、好評を得た。また、多摩市で同様に活動されている市民グループにも参加を呼び掛けていただき、当日は日野市民と多摩市民の交流の場として良い機会となった。その結果、七生丘陵調査団のメンバーからだけでなく、多摩市側の乾学芸員、市民グループメンバーからも、今後は是非共同で調査やイベントを行ってほしいという声をいただいた。

そして、今年度は多摩市との境を歩いたが、まだ八王子市との境もある。八王子市で活動する市民グループや八王子市郷土資料館との連携も今後必要になってくるかもしれない。



七生丘陵調査団メンバーの解説を聞く講座の参加者

3. 「越境」や「連携」

今、それぞれの博物館がこれまでの活動モデルを乗り越えようと、知恵を絞り懸命に努力している。

自治体立博物館に勤務し、うかうかしていると、歴史相対的な概念でしかない「自治体の範囲」＝「地域」と視野が固定化され、その範囲で仕事をこなすことが精いっぱいになってしまいはしないだろうか。

しかし、今後は「越境」なり「連携」なりを日常的に視野の中に明確に組み込んで、これまでの地域博物館活動を乗り越えていくという方向性もありうるのではないかと。振り返ると、当館ではすでに「勝五郎生まれ変わり物語調査団」が「越境」して、物語の一方の舞台であった八王子市内の公民館で出張展示を行っている。

もちろん、巡回展あるいは特定テーマでの連携展などはこれまでもあったが、今一步踏み込み、そこに市民もかかわるという展開もあってよいのではないかと。

聞き取り調査の現況

小金井市文化財センター 多田哲

昨年、市内の貫井共同墓地を管理されているSさんに貫井部落の故事を伺っていたところ、「おおせど」と呼ばれた地域の話が出てきた。貫井神社前からはけの道を東に200mほど行ったあたりで、ここに湧き水があり小さな滝になっていたと云う。数多あったはけの湧水のひとつであろうが、舗装され宅地化された現在では見る影もない。昭和53年に発行された『小金井市誌V 地名編』には、「大せど」という俗称は家屋敷の裏口の意味で、場所は不明であるとしている。「おおせど」一帯は前田別荘(三楽荘)の所有であったというSさんの証言と併せて考えると、市誌の記述は興味深い。また、地元の郷土史家芳須緑が著した『続小金井風土記』には、「三段の滝」については載せているが「おおせど」の地名の記述はない。地図上で確認できたのは僅かにひとつだけで、昭和14年に発行された『小金井町土地宝典』に、小さな水路が貫井プールの排水路に落ちているのが記入されている。情報を総合すれば、貫井神社東のはけの道に小規模な湧水の滝があり、土地の人々はその周辺を「おおせど」とならい称していたと考えるのが妥当だろう。だが、それは断片的にしか文章化されなかったため、いつの間にか忘れ去られていたらしい。

地元にはまだまだ昭和戦前の記憶を持つ方が健在だが、その多くは市史など一度も読んだことがない。既知の事実を長々聞かされて閉口することもある。しかし、何度も会ったことがある方でさえ、時折、「そんな話は初めて聞いた」と思わずつぶやいてしまう話をされることもある。話し手は何が重要で、知られていない事実なのか分かっていないのだ。我々聞く側としては、繰り返し足を運び世間話を交えながら、新事実をすくい上げなければならぬ。初対面の方にICレコーダーを突きついたりするのは言語道断で、忽ち話が弾まなくなってしまう。根気と時間が費やされる仕事には違いないが、時たま「当たり」に行き当たったときには、この仕事をしていて良かったと思える。

小金井市では昭和59年を最後に、本格的に組織だった聞き取り調査を行っていない。この間に話し手の世代交代があり、現在では昭和戦前が「古い話」の部類に入る。平成よりひとつ昔の昭和でさえ、戦中・敗戦直後に至っては紙資料が少ないため、実体験による証言は貴重となる。そして、その話を聞く機会は今以外に無い。乏しい人員・時間を少しでも割けるような方向に持っていきたいが、その道のりは未だ遠い。



『小金井町土地宝典』昭和14年より

企画展「ハケ展～くにたちの河岸段丘～」

くにたち郷土文化館 齊藤有里加

くにたち郷土文化館では、24年度秋季企画展「ハケ展～くにたちの河岸段丘～」を行ないました。期間は10月19日～12月10日見学者数2685名でした。関連企画として、講演会「ハケ・ママの地名をさぐる」フィールドワークはけをめぐる「①国分寺・くにたちのハケをめぐる」「②昭島のはけをめぐる」を実施いたしましたが、いずれも定員を超えるお申し込みがあり、予想外の反響に大変驚きました。

「ハケってなんですか？」とよく来館者の方から質問を受けます。くにたち郷土文化館のテーマは、「過去・現在・未来を結ぶ一多摩川が育んだ段丘（ハケ）とともに生きる私たち」として、ハケをテーマにしたものとなっています。くにたちでも特に谷保の辺りでは当たり前のように使う、「ハケ」という言葉。あらためて取り上げたことがなかった、と気づきこれが展示を行うきっかけとなりました。

ハケという地名は、斜面を指す地名です。多摩地域のハケ地名を調べるために、角川地名大辞典を引くと、50余りの「ハケ」のつく小字名が見つかりました。地形図にプロットしていくと、特に青梅の辺りに多く、多摩川の左岸を中心に、河岸段丘の崖線に沿った形で分布していることが分かりました。国立市内には、国分寺崖線、立川崖線、青柳崖線の3つの崖線が通っています。大正10年の村絵図に「下ハケ」、「峡下（はけした）」の字名が記されており、国分寺崖線の下と、青柳崖線の下がその位置にありました。ハケ地名が多摩川の上流から下流にかけて、河岸段丘の崖線に沿って連なるように分布していたことは面白い発見でした。

また、ハケはどうやってできたのか？ということ伝えるため、地形の成り立ちの変遷図や、地形模型を使って展示を行いました。地形模型は横から見ると断面図がみられる力作です。関東ローム層、礫層を通り、ハケの下から湧水が出てくるイメージが良く伝わります。

展示を行って驚いたことは、国立市以外の「ハケ」のある地域から見に来られる方が多かったことです。「うちの方のハケはね…」と親しみをもって話してくださいませ。湧水があって、ワサビ田があって、水車小屋があって…と共通項を探すのはとても楽しく、改めて私たちの地域のつながりを感じました。

今回の調査では見つかったのは50程度のハケ地名でしたが、河岸段丘崖ではないところにもハケ地名もあり、実際にはもっとたくさんのハケ地名があると思います。どんな斜面なのか、地下水は湧いているのか、今でも「ハケ」と呼んでいるのか…など、多摩地域のハケについて、ぜひ情報を寄せていただければと思います。



写真① 展示室の様子



写真② ハケ（青柳崖線）

平成 24 年度の活動報告

東大和市立郷土博物館 浜田恵美

平成24年度の活動について、まずは企画展やロビーで行った展示を挙げていきます。

「やきものの民具」(平成24年3月17日～6月17日)

お皿や茶碗などの食器、火鉢などの暖房具、甕や壺など、収蔵資料の中から陶磁器類を集めて展示しました。このような収蔵資料展は、テーマを変えながら実施し、今回で8回目となります。

「狭山丘陵で学んだよ」(平成24年3月24日～5月6日)

職員が出張授業で環境学習を行い、狭山丘陵や公園で観察や体験を通して自然を学んだ小学生たち。作った作品や学習の様子を紹介しました。

「だれでもできる天気予報」(7月21日～9月9日)

かつては空を眺め、雲を見て、身近な生き物の動きから予報しました。写真パネルや剥製、実物を展示して天気まつわることわざ・言い伝えを紹介しました。

「空と深海の神秘」(7月28日～9月9日)

プラネタリウムの番組に関連して、深海のふしぎな世界や、5月に見られた金環日食など話題の空の現象を紹介しました。

「多摩の戦跡パネル展」(8月7日～8月31日)

今日に残る多摩地域の軍需工場や軍事施設などの戦争の痕跡を写真で紹介しました。

「植物画を描く」(10月20日～12月9日)

6月～8月に開催した全6回の連続講座、植物画教室。この講座の講師や受講者が描いた植物画(ボタニカルアート)を展示しました。

「ひなまつり」(2月22日～3月3日)

寄贈されたひな人形を、市民グループと協力し、グループが作ったつるしびなどと一緒に展示しました。

「鳥と木の実」(3月20日～6月16日)

鳥に食べられフンと一緒に運ばれる種、そのために色を付けたり甘くなった木の実。野鳥と木の実の関係について、剥製、標本、写真などで紹介しています。

プラネタリウムは、季節ごとに番組を入れ替えて投影を行っています。春は、特に5月21日の金環日食に合わせて、日食のしくみや安全な観察方法を紹介した春番組「太陽のかくれんぼ」を制作・投影したり、日食めがねの工作教室や小学校への日食事前授業を行いました。観察の結果は展示にもしています。

夏は、「ディーブワンダー」という、生命の起源を求めて、深海から宇宙へ旅をする番組を投影し、それに連動した展示も行いました。

秋番組では、テレビアニメで人気の「宇宙兄弟～一点

のひかり」を投影し、好評を得ました。

冬番組は、「アイヌの星空とシンシンの中国星座ガイド」。普段目にする西洋の星座とは違う、北方先住民族アイヌの星座と、中国の星座を取り上げて、紹介しました。

このほかにも、自然や天文の観察会、文化財めぐりなどの参加型企画を年20回ほど、学校授業や団体の対応は、プラネタリウムも含めると、12月までで160回ほど行っています。

自然や天文の分野では、すでに20名ほどのボランティアがいて学校授業や観察会で参加していますが、今年度から新たに文化財ボランティアの育成を開始しました。学校授業や講座のお手伝いのほか、郷土史関係の団体が高齢化等の理由で、活動停止や解散してしまっているため、その活動の引き継ぎなどをねらいとしています。実際の活動はこれからとなりますが、新たな取り組みとして活動の幅を広げていきたいと思っています。



「だれでもできる天気予報」・「空と深海の神秘」



「多摩の戦跡パネル展」

開館 25 周年記念事業展示

「つながる！市民のちから～市民と歩んだ 25 年～」を終えて

パルテノン多摩歴史ミュージアム 乾賢太郎

パルテノン多摩は、平成 24 年（2012）10 月 31 日に開館 25 周年を迎えました。これに伴い、当館では平成 24 年度を開館 25 周年記念事業期間と位置付けました。期間中には、「つながる」をキーワードに音楽・演劇・映画・美術部門において様々な事業を展開しましたが、博物館部門でも記念事業にふさわしい事業を実施しました。例えば、歴史ミュージアム企画展「街から子どもがやってきた～戦時下の多摩と学童疎開～」では、品川から学童疎開を受け入れた多摩村・稲城村の姿を展示し、戦時下から今に至る人々のつながりを確認しました。また、記憶をつなげるという観点から、多摩ニュータウン開発によって変化した景観を記録するため「航空斜写真」を撮影し、市民ギャラリーでその成果を公開しました。さらに、長年植物標本の整理を担ってきた多摩市植物友の会が、押し葉しおり作りのワークショップを行いました。この他にも色々な事業を実施しましたが、平成 24 年 9 月 29 日（土）～10 月 14 日（日）には、開館 25 周年記念事業展示「つながる！市民のちから～市民と歩んだ 25 年～」を開催しました。

この展示では、ボランティアの活動や、市民と創り上げた文化活動を通して、パルテノン多摩と地域が「つながる」様子を紹介しました。パルテノン多摩は、25 年の歩みの中で、多くの市民と協力し、さまざまな成果を生み出してきました。例えば、当館では、地域の歴史・民俗・自然などを学ぶボランティア活動を行っており、その成果を着実に発信しています。また、文化活動への理解を深めるため、市民に文化・芸術に触れる機会を提供し、多岐にわたった支援を行っています。

ボランティアの紹介では、当館の博物館部門に属する古文書解読ボランティア、植物標本整理ボランティア、石仏調査会、定点撮影プロジェクト、多摩くらしの調査団、はたおりボランティア、キッズサポーターの活動を中心に、それぞれが培ってきた成果を展示しました。団体によっては、ボランティア自身がパネルの文章を執筆し、展示の設営に協力し、展示解説を行うところもありました。ボランティアの活動を紹介した展示を通して、今までの成果や蓄積が十分に公開できたと思います。

また、パルテノン多摩の事業部門では、長く続けてきた市民活動や、多くの人が楽しむことのできる市民活動に対し、会場の確保や提供、広報協力などの支援を行い、市民団体同士の共演・協働のための橋渡しの役割も担っています。このことから音楽や演劇に関するいくつかの市民団体についても展示で紹介しました。

会期中は多くの方にご来館いただきましたが、展示室

では、ボランティア、市民団体、当館協力者、来館者などの交流が見られ、記念事業のコンセプトであった「つながる」がまさに実現できたような感がありました。当館と市民が共に歩み、共に築いてきた成果を発表する場としては、とてもふさわしい内容でしたので、いつかまた企画・実施できればと思います。



展示ポスター



ボランティアによる展示設営



展示風景



ボランティアによる展示解説



展示「空から街をみる」では、航空斜写真の撮影成果を公開

開園 20 周年を迎えて

江戸東京たてももの園 高橋英久

平成 5 年 3 月 28 日に開園した江戸東京たてももの園は今年、開園 20 周年を迎えます。

当園は 20 年の歴史の中で、より多くの方の博物館に対するニーズに応えられるよう様々に拡充発展、また試みを行ってきました。

開園当初の復元建造物は、旧光華殿、子宝湯、高橋是清邸、吉野家、八王子千人同心組頭の家、西川家別邸、小寺醤油店、武居三省堂、花市生花店、鍵屋、伊達家の門、天明家、奄美の高倉、旧自証院霊屋、万世橋交番の 15 棟でしたが、20 年を経て現在では 29 棟の移築復元建造物が完成し、この春には 30 棟目の建造物が公開される予定です。

平成 8 年にはボランティア制度の試行を開始しました。当初 29 人だったボランティアも現在では 200 名を数える規模になっています。茅葺き民家の燻煙を始め、園内ガイド、催事の補助等を担い、園の発展に大きく貢献しています。

平成 15 年には「特別夜間開園下町夕涼み」も実施しました。通常の開園時間を延長するという前例のないことで安全管理上の課題も多くありましたが、地元商工会や消防署等の協力を得て、現在でも大人気の催事となっています。

また展覧会の関連事業として復元建造物や園内の情景再現に絡めて、「千と千尋の神隠し」や「ドラえもん」、「ゲゲゲの鬼太郎」等と連携イベントを開催し人気を博したこともありました。

この 3 月にはこの 20 周年を記念して、3 月 28 日(木)をはさみ一週間を通して記念事業を実施します。

3 月 23 日(土)には「“大”けんちく体操」とスカンセン野外博物館(スウェーデン)館長、オランダ野外博物館館長、陣内秀信先生(法政大学教授)をお迎えしての「記念シンポジウム」を開催します。24 日(日)には、「ファミリージャズコンサート」。25 日(月)には「ファミリー向けコンサート」。26 日(火)には「ボンネットバスの園内運行」。27 日(水)には下町の復元建造物

をめぐる「おつかいゲーム」。28 日(木)には民俗芸能としてさまざまな形で伝承されている伝統芸能「田楽」に現代的な身体表現や音楽の要素を取り入れ、あらたなパフォーマンスとして上演する「大田楽」を行います。

「大田楽」はワークショップを開催し、地域の方々の参加を得て作り上げる事業です。28 日(木)・29 日(日)にはヘブンアーティストのパフォーマンスを披露します。この他にも 23 日(土)から 29 日(金)までは中央線にちなんだ B 級グルメのコーナーを設置します。さらに 28 日(木)は開園記念日として入園が無料となります。ぜひご来園ください。

当園はこの 20 周年を契機として、新たなステージへ歩みを進めていきます。安心・安全でより魅力的な野外博物館として、多くの方にご来園いただけるよう発展していきます。



特別夜間開園下町夕涼み



ボランティア活動(囲炉裏の燻煙)

平成 24 年度の広報活動について

東京都埋蔵文化財センター 広報企画係

今年度も縄文時代に絞ったテーマを設定し、企画展示テーマは「縄文人の食事」となりました。

小学校の教科書に縄文時代の記載が復活したこともあり、また最近では児童たちに埋蔵文化財に対する理解を深めさせるためにも縄文時代に特化した企画展示を行っております。企画展の展示方法としては、現代の道具と縄文時代の道具を一緒に展示するなどして、「モノ」の歴史も学べるように展示工夫をしています。

通史展示は、数多くの縄文土器を露出展示し、見学者に見るだけではなく、実際に直接触ってもらってより縄文時代を感じていただくことを重視した展示にしました。

体験コーナーでは火おこし擬似体験とドングリ磨り潰し体験、縄文土器復元パズルなどを設けて、体験する楽しみを味わっていただいております。ドングリクッキー作りのレシピは大人気で、持ち帰って実際に作ってみたいという声が沢山あります。

今年度行事では、「縄文ワクワク体験まつり」を2日間行い千人以上の参加者がありました。まつりの体験メニューに新たに弓矢体験を加えたところ大人気でした。

新規事業として、「トンボ玉作り教室」「遺構を実測してみよう」「遺物を撮影してみよう」を実施しました。トンボ玉作りは当センターが調査した北区の遺跡からガラス小玉の鋳型が出土したことから、ガラスの歴史を講義しながらトンボ玉を製作する体験教室です。

また、考古学で必要不可欠な遺構の実測や遺物の写真撮影の体験を実際に体験して、考古学をより身近に感じていただくために今年度から実施しました。他では団体との連携事業数を増やし、区部との親子縄文土器作り教室や文化財講座を設けました。

このように今年度も積極的に東京都埋蔵文化財センターの名を知っていただき、一層の利用をしていただくよう努力を続けているところです。



平成24年度展示「縄文人の食事」



トンボ玉作り教室



遺構を実測してみよう



遺物を撮影してみよう

平成 24 年度活動報告

集合住宅歴史館 野原亜沙子

集合住宅歴史館は、(独)都市再生機構 技術研究所の中の施設のひとつで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元し、集合住宅建設技術等の歴史・変遷を展示公開しています。

一般公開

集合住宅歴史館が設置されている(独)都市再生機構技術研究所では、まちづくりや集合住宅に関する先進的な調査研究や技術開発・試験を行っており、その一部を広く一般に公開しています。敷地内には、実験・研究用のものが10施設、展示・公開用のものが6施設あります。展示・公開用施設は事前予約制で見学可能となっており、毎年多くの方々にご来場いただいています。昨年度は震災の影響もあり、キャンセル等が多数ありましたが、1852人の方々にご来場いただきました。

特別公開

今年の5月に「特別公開」という、事前予約なしで自由に研究施設をご覧いただける2日間のイベントを実施致しました。特別公開では、「団地の研究所に行ってみよう！—集合住宅のこれまでとこれから—」をテーマに、

通常非公開である風洞実験棟や振動実験棟などの実験施設の公開、外部有識者による特別講演、研究所内を案内するガイドツアー等を行いました。ガイドツアーは「集合住宅の住まい方の変遷」「環境とまちづくり」「安心・安全・省エネ」という3種類の内容に分かれて実施しました。「集合住宅の住まい方の変遷」ツアーでは“集合住宅のパイオニアである機構が描く、住まいの過去・現在・未来”という趣旨で、集合住宅歴史館を含む所内の3施設をご覧いただきました。

その他にも、実際に現場で使用されている機材を用いて漏水探索ができるコーナーや、集合住宅の遮音性能の違いを体験できる実験室があり、1077人ものの方々にご来場いただくという大盛況の2日間となりました。



日本の集合住宅の歴史
について解説中。



集合住宅の周りに生物
生息空間もあるよ。

プラネタリウムがリニューアルオープン

多摩六都科学館 安倍覚子

平成24年7月7日プラネタリウムドームがリニューアルオープンしました。新しいプラネタリウム投影機は、ケイロンII(株)五藤光学研究所製を導入しました。直径23mを超える大型ドームでは世界初となる高輝度LED光源を採用し、世界最多1億4000万個の恒星の投影を実現。8月には「最も先進的なプラネタリウム」として、世界一に認定されました。

シャープな星像、天の川をもすべて恒星で映し出したリアルな星空がたいへん好評で、8月には「全編生解説」のプラネタリウムを開始しました。今夜の星空紹介とともに季節ごとのテーマにそって解説員が生解説し、好評を博しています。それぞれの解説員の持ち味の違いも評判です。

平成25年3月には体験型展示で人気の展示室もリニューアルオープンします。「チャレンジ」「からだ」「しくみ」「自然」「地球」のテーマに分かれた新しい展示室は、「科学すること」を楽しめる仕組みになっています。工作や実験、観察のできる4つの「ラボ」も新設。触れ合い、つながりを大切にしたプログラムにご注目ください。



ケイロンIIで投影した天の川

平成 24 年度ハンセン病資料館活動報告—展示活動を中心に—

国立ハンセン病資料館 田代学

1、企画展

今年度も年 2 回の企画展を開催した。

戦後ハンセン病は治る病気になったが患者を療養所に隔離するらい予防法は継続し、社会の偏見も濃厚なままであった。その時代に後遺症が軽いうちに治癒し、経済的・社会的支援も正式な退所規定もない中で「社会復帰」した青年の姿を展示したのが春季企画展「青年たちの『社会復帰』—1950-1970—」である。ハンセン病回復者にとっての「社会復帰」とそれを受け止める私たち「社会」のありようを問うことを目指した。本企画展では前半に同時代の「社会復帰」をめぐる動きに関するコーナーを、後半には「社会復帰」を経験した 11 人の証言を読むことができる机を並べ、それぞれの話にまつわる写真・実物資料を展示したコーナーをもうけた。後半の当事者の声に向き合うコーナーでは、来館者が熱心に証言を読む光景が見られた。ギャラリートークも月 1 回行った。「社会復帰」を経験した回復者の生の声を聞くことを目的に、付帯事業として 2 度の「社会復帰」をした中修一さんの講演会を 6 月 10 日に開催した。「社会復帰」した回復者からも意見がよせられ反響のある企画展となった。



証言を読む来館者

秋季企画展「癩院記録—北條民雄が書いた絶対隔離下の療養所—」は作家北條民雄が 1936 (昭和 11) 年雑誌『改造』に連載した随筆「癩院記録」と「続癩院記録」を展示化したものである。全生病院に入院していた北條が記録した「絶対隔離」の時代の療養所内に関するルポルタージュを、当時の道具や写真を用いて展示として表現し直すことを目指した。“どんなに酷い状態になっても人が生きることは尊い”という北條のメッセージを伝えるため症状が重い患者の写真も展示したが、重症患者の姿を多くかつ展示スペースを広く使って出すのは当館としては初めての試みであり、間違った認識を与えていないかという緊張感の伴う展覧会であった。また本企画展は随筆そのものを展示しておらず、来館者には展示と共に随筆を原作のまま読んで貰うことで「絶対隔離」の時代の歴史認識に厚みを持たせることを目的としたため、図録

には随筆すべてを掲載した。これまでの企画展に比べ比較的多く来館者が図録を求めていることを考えると、北條民雄のネームバリューだけでなく展示の意図もある程度来館者に伝えることができたのかもしれない。付帯事業としては、展示しなかった北條民雄の人となり補うことを目的として 11 月 10 日に『吹雪と細雨 北條民雄・いのちの旅』の著者である清原工さんの講演会を開催した。北條民雄のファンが集まり、講演者へ多くの質問があり盛況であった。



秋季企画展の講演会

2、館外での展示活動

今年度から社会啓発を兼任する学芸員を置き、館外での講演活動や啓発活動を積極的に行っている。9 月 23 日から 26 日まで特別企画展「北高作陶展」を天理教の施設であるギャラリーおやさと(天理市)において開催した。北高さんの新作 8 点を含む 20 数点の作品、北さんの作陶風景とインタビューを収めた動画、ハンセン病とその歴史や天理教とハンセン病の関係を示す年表パネルを展示した。北さん自身が熱心な天理教信者であり、北さんと長年交流のある天理大学宗教科「成人会」の会員をはじめとする天理教関係者や、関西に在住の来場者の姿も多く見られた。9 月 25 日には天理大学ふるさと会館にて、北さんと当館図書室長儀同政一による講演会を開催した。天理教の祭日と重なったこともあり 4 日間で 900 人以上の来場者があった。普段来館できない方々の来場もあり、多くのご意見もいただいた。啓発活動の一環として今後も館外活動の機会を設けていきたい。

3、2013 年度の展示活動に向けて

来年度は当館の開館 20 周年にあたる。当館は 1993 年 6 月に高松宮記念ハンセン病資料館として回復者の手によって開館した。2002 年には初めて学芸員が採用され、2007 年に国立ハンセン病資料館としてリニューアルオープンし、現在に至っている。2013 年 6 月を中心に、これまでの当館の歩みを紹介する特別企画展や、講演会などを行う予定である。

金環日食

八王子市子ども科学館（サイエンスドーム八王子） 森融

日本で昭和62年以来25年ぶり、多摩地区では天保10年以来173年ぶりの金環日食を迎えるにあたり、どのような講座で普及ができるか。当館では前年10月の予算策定時から検討してきました。一番の問題は当日の観察会を開催するかどうか。今回は休館日である月曜日の日食で、金環日食になる時間帯が朝7時32分という早朝。

平成21年の夏休みの部分日食時には観察会に多くのお客様が押し寄せ、車が駐車場に入り切れず近くの国道2本まで渋滞を起こしてしまった経験もありました。

観察会のことは懸案としながら、以下のような計画を立てていきました。

- ①金環日食のプラネタリウム番組を制作する
- ②一般向けの金環日食学習会を開催する
- ③小・中学校教員向けの学習会（研修会）を開催する
- ④事前の太陽観望会を開催する

プラネタリウム番組は年度明けから投影したいため、すぐにシナリオなどの制作に取りかかりました。

一般向けの学習会は4月21日から日食前日の5月20日までの土日に6日全14回を計画。プラネタリウム内でおこなうため、回数を多く開催したいところですが、一般番組を中止しなければなりません。マスコミ等で話題



学習会 地球と月の大きさと距離

になってくるのがゴールデンウィーク明けと予測し、その後の土日で回数を多く開催する計画を立てました。

教員向けの学習会は11月の中学校理科部会の研修で来年の天文現象のレクチャーをして、来年の打ち合わせをおこない、小学校部会へも呼びかけることとしました。

事前の太陽観望会は5月13日と金環日食前日の20日に天体望遠鏡や日食メガネ、ピンホール観察器などで太陽の見方を実践してもらおうという計画です。

懸案のままであった当日の観察会ですが、スポンサーが現れました。八王子「宇宙の学校」を一緒に開催している東京八王子プロバスクラブから日食メガネを提供していただけることになり、参加者の駐車台数も考えて定員300名で当日の観察会を開催することとしました。

このように24年2月末頃までに全ての計画が固まり、印刷物も出稿しました。

年度が替わって4月21・22日は学習会。地球を20cmのボールとすると月は5cm。地球一月の距離は約6mで、太陽の大きさは当館のプラネタリウムドーム21mより少し大きい21.8m。このような実演から学習会を始めます。太陽を見て起こる日食網膜症や通学時間帯の日食であるため、その注意などもレクチャーしました。

4月24日には教員向けの学習会を開催。これに合わせて新聞社の取材もありました。



牛乳パックやダンボール箱の観察器

ゴールデンウィーク明けは、予測通りマスコミで日食情報の露出が多くなってきています。13日には事前太陽観望会に日本テレビの朝の情報番組ススキリの取材がありました。

いよいよ最後の土日、学習会・太陽観望会には多くのお客様にお出でいただきました。ただ天気は曇りがちで、明日の予報も「くもり」で、明日太陽が見えるかどうか危ぶまれます。

こうして日食前のすべての講座①～④が終わりました。学習会は計1242名と、平成21年の日食時（6回で953名）に比べると1回あたりのお客様は約半分でした。また日食に関する電話問い合わせも、前回は前日の半日はずっと電話で質問を受けていましたが、今回は電話がほとんど無く、テレビや新聞、インターネットなどで情報が充分に行き渡っていることが感じられました。

いよいよ当日、朝5時に出勤すると、観察会は7時からなのに既に駐車場の入口に待っている車があります。

雲が多いながらも風で流れていて、時々雲を通して欠けていく太陽が見え、雲が厚くならないように祈るのみ。



金環に近づくと、雲が掛かっているせいか少し薄暗くなってきています。また雲のためピンホール観察器では太陽像があまりよく見えません。

盛り上げようと「30秒前からカウントダウンしましょう。」と声を掛け、みんなの声は「5、4、3、2、1、0!」とだんだん大きくなり、一斉に歓声（悲鳴）に変わりました。雲を通して、日食メガネでしっかりとリングが見えています。約5分のリングを楽しみ、再度、終了のカウントダウン。「3、2、1、あー!」というため息とともに金環は終わりました。その後、丸く戻っていく太陽をピンホール像などで楽しみ、観察会は無事終了になりました。

とにかく、見るのができて良かった!

国立天文台天文機器資料館の活動

国立天文台天文機器資料館 中桐正夫

三多摩公立博物館協議会に準会員として参加させていただいている名称は「国立天文台天文機器資料館」である。国立天文台では「国立天文台博物館」設置を目指して天文情報センター・アーカイブ室を中心に活動を行っている。平成24年度の主な活動は、博物館構想をまとめ、その実現に向けて「国立天文台博物館構想シンポジウム」を開催したことである。このシンポジウムは11月3、4日と土曜、日曜日の開催にもかかわらず80名を超える盛会であった（写真1）。



写真1

国立天文台博物館を目指しているが、現実には博物館と称していないだけで、広大な国立天文台は見方によってはすでに博物館である。国立天文台になって、今年が25周年を迎えるが、その前身である東京大学東京天文台は、江戸幕府の天文方からの歴史を引きずった組織であり、東京大学観象台が出来たのは1878年であるから135年の歴史を持っている。正式に東京大学東京天文台になったのは1888年（明治21年）で、海軍省観象台があった当時の麻布区飯倉に置かれた。麻布飯倉の天文台は1923年の関東大震災で壊滅し、1924年には三鷹市に移転した。三鷹への移転は震災とは関係なく、都心の観測条件の悪化と敷地の狭隘なことから、空の暗い広大な土地を求めて1914年（大正3年）から移転を始めていたが、震災を契機に一気に移転を完了した。

国立天文台には、麻布時代からの観測機器、写真乾板、資料などが残っており、また大正期に建設された観測施設（ドーム）の多くが、その中の望遠鏡とともに残っている。これらの多くの望遠鏡はすでに何十年も前にその役目を終え、永い眠りについてしたが、この時期に至って、国立天文台アーカイブ室が設置され、初めて過去の施設、機器類を発掘、整備をする人物（筆者）が現れ、その歴史的な建物、観測装置、天体写真乾板等の展示を始めたのが2008年であった。

国立天文台には1998年に太陽塔望遠鏡棟が文化庁の登録有形文化財となり、2002年には第一赤道儀室（20cm 屈折赤道儀望遠鏡）、大赤道儀室（65cm 屈折赤道儀望遠鏡）が登録有形文化財になった。また2011年には1880年にドイツで製作されたレプソルド子午儀が国の重要文化財に指定された。そして2012年にはレプソルド子午儀室、ゴーチエ子午環室を登録有形文化財に申請した。

天文博物館としての研究活動も行っており、今年度は「重要文化財に指定されたレプソルド子午儀について」、「日本最古の星野写真乾板の発見」の2本の論文も投稿した。写真2は日本人が最初に発見した小惑星の1900年3月6日、9日、20日の移動を示した図である。

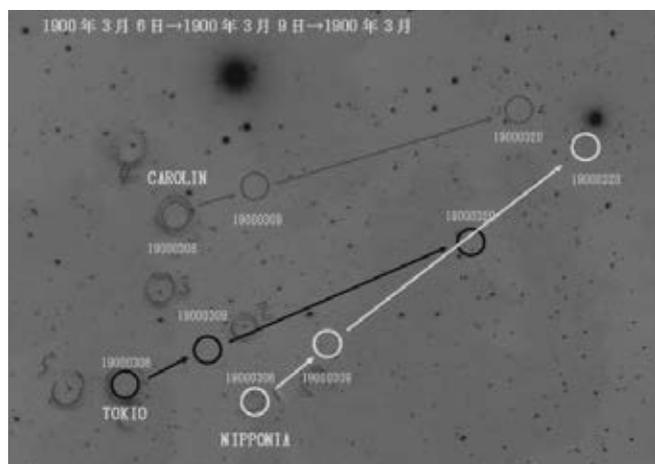


写真2

国立天文台は天文学研究の中核機関であり、最新の天文学研究には多大なエネルギーが傾注されるが、博物館構想のような過去の歴史に目を向けることは難しい。しかし、最新の科学は過去の歴史の上に成り立っているのである。最新の成果も分かりやすく展示し、過去を振り返り、現代の成果への橋渡しをしたいと考えている。

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩 No. 34

編集委員 清水正治（檜原村郷土資料館）

安藤陽子（日野市郷土資料館）

多田 哲（小金井市文化財センター）

安齋順子（くにたち郷土文化館）

発行 東京都三多摩公立博物館協議会

（平成 24 年度会長館 くにたち郷土文化館

国立市谷保 6231 番地 ☎042 - 576-0211 ）

印刷 株式会社アトミ

発行日 2013（平成 25）年 3 月 31 日

東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩 8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町 33	042-622-8939	JR八王子駅南口から徒歩15分/JR八王子駅南口から「東京家政学院」行、「上野町三丁目」下車徒歩3分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田 3562	042-726-1531	小田急線 JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩 12分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑 1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩 20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川 850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩 7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町 5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩 1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920-1	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩 20分/コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車、徒歩10分/駅前バス乗場1番から西武バス乗車「郷土博物館入口」下車徒歩1分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩 5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環13「小金井公園入口」下車徒歩 5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市」駅から西武バス(イオンモール行き)または都営バス(青梅車庫行き、箱根ヶ崎駅行き)で「八幡神社」下車徒歩2分/多摩モノレール「上北台」駅からちよこバス(外回り)で「八幡神社」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩 9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西部バス「小金井公園西口」または関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町 1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩 20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王線相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5分
集合住宅歴史館(都市再生機構都市住宅技術研究所)	八王子市石川町 2683-3	042-644-3571	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩 5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩 18分/西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
八王子市こども科学館	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」北口から西東京バス「杏林大学」・「戸吹」・「みつ台」行き等「福祉会館」下車徒歩 2分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢 2-221-1	0422-34-3962	中央線武蔵境駅から小田急バス「狛江駅行き」天文台前下車/京王線調布駅から小田急バス「武蔵境駅南口行き」天文台前下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢 1-1	042-677-1111	京王線相模原線「南大沢駅」下車徒歩5分